CRAZYな恋

古月ひなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＲＡＺＹな恋

【Ｎコード】
Ｎ５６０１Ｕ

【作者名】
古月ひなこ

【あらすじ】
外資系企業で勤務する白井みゆ。平凡な彼女の前に突如現れたのは、帰国子女で、外貌も性格もアメリカンナイズされた如月まさき。両親や彼氏に頼って生きてきたみゆとは反対に、自分の生き方を強く持ち、すべてを自分のペースに巻き込んでしまう彼女の存在に、だんだん心惹かれていくみゆ。
男の子との恋しか知らなかったみゆが、自分も知らぬ間に女の子に恋心を抱いてしまう自分に困惑を隠せない。
みゆを想うまさきと、みゆの彼氏である松江翔との狭間で揺れ動く、

みゆのＣＲＡＺＹな恋の行方は…？

唐突な出会い（前書き）

このストーリーは同性愛の内容が含まれておりますが、あくまで主人公は同性愛者としての自覚も意識もない設定で描写されておりますので、同性愛者の読者の方には一部不快に感じられたり、物足りないと感じられることもあると思いますが、ご容赦ください。

唐突な出会い

ねぇ、まさき、あなたは覚えてる？あたしたちが出会った日のことを。私の２８歳の誕生日、まるで運命のようにあなたはあたしの前に現れた。。。

「白井さ～ん！これもお願い！」
「はい。やっときまーす。」
寒さがますます厳しくなる１２月。今日はあたしの誕生日。なんてことは誰もおかまいなし。はぁ～、今年も何事もなくこの日が過ぎていくのかな。

あたし、白井みゆは本日で２８歳。外資系の企業で秘書として勤務し早５年。秘書といっても、この会社中のありとあらゆる雑務まで回ってくるハメで、毎日が忙しい。勤務歴５年のあたしは会社の中でようやく信頼されつつある位置となり、毎日の仕事にやりがいは感じているものの、マンネリ化する日々との闘いもあった。
一方私生活では、３０歳の彼と結婚を前提にお付き合いして３年になる。彼はあたしにとても優しいけれど、最近仕事が忙しくてすれ違いが重なる日々。この日も彼は出張で、お誕生日の夜も一緒に過ごすことができない。

「おつかれ～！あれ？白井さんまだ帰らないの？」
「ちょっとまだ残ってる仕事があって。先帰ってね。あたしもすぐあがるから。」
「じゃあお先に～。」
どうせ急いで仕事を終わらせても、彼は出張でいないし、最後まで仕事やり終えてから帰ろう。。。そう思って５時を過ぎた夕焼けを背に、あたしは机の上にたまった書類を整理し始めた。

ドドドド…！バタン！
突然の足音とドアを開ける音に、あたしは驚いてドアの方に目を移した。するとそこには見かけない女性が息を切らせて立っていた。
「お願い！ちょっと手伝って！」
そう言うと、彼女は有無を言わさずあたしの手を引っ張って会社の玄関口まで駆け下りていった。
な、なに？この人？？
あたしは訳がわからず、手を引かれるがままに駆けて行くと、そこには3人の欧米ビジネスマンが立っていた。
「紹介します。この方たちはうちの企業と契約を結びたいと言って来られてるんだけど、今日は部長も総経理もいないし、代わりにうちの会社の案内とか経営方針を説明してもらえないかな？通訳は私がするから。」
は、はぁ〜〜？？そんな唐突な。。それに全然あたしの仕事範囲内じゃないし。。と思いつつ、顧客を前に嫌な顔をするわけにもいかず、3人の欧米人たちをとりあえず会社の中一通りを見せながら案内し、最後に応接室に通した後、契約条件、経営方針について説明をした。その間、彼女はあたしと欧米人たちの間に立って、流暢な英語で通訳をしていった。
一連の会談が終わった後、欧米人の彼らは相当満足した様子で、これからもうちの会社と親密な関係を結びたいと言って去っていった。なんだか突然の事だし初めての事で頭の中が錯乱状態。まぁどうやら無事に終わったみたい。ほっと一息をついてるあたしの横で、突然現れた彼女はガッツポーズをした後、いきなりあたしに抱きついてきた。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！！ほんとに助かったよ〜〜！」
「そ、それはよかったです。それじゃあまた。。。」
「ちょっと待って！なんかお礼させてよ。君がいなかったらこの商談ぶち壊しだったんだから。ほんとに私にとって命の恩人、女神だよ、君は！」

「そこまで喜ばれることはしてないけど、とにかくうまくいってよかったです。あの、あたしまだ仕事が残ってるんで。。。」
「私は営業部の如月(きさらぎ)まさき。先月この会社に入社したんだ。よろしく！君の名前何ていうの？」
人の話全然聞いてないや、この人…。それにしても栗色の短髪にスラっと伸びた長身。モノクロのパンツスタイル。さっきまでのクールな表情とはうって変わって、くったくのない笑顔で話す彼女。そのクールで美しい外貌と、周りをすべて自分のペースに巻き込んでしまう不思議なムードに、なんだかそのまま飲み込まれていきそう。。。
「あたしは白井みゆです。秘書やってます。こちらこそよろしく。」
「え！？あの白井さん？入社当時から聞いてましたよ。この会社じゃすごく優秀な人材だって。どおりで。さっきの商談の時、白井さんのプレゼン、すごく素晴らしかったです！いや～尊敬するなぁ。私も早く白井さんみたいになりたいよ。そうだ！今からごはんでも行きません？」
「あの、あたしまだ残ってる仕事があるから。ごめんね。」
「そっかぁ。残念！じゃあ何かないかな～～」
そう言って彼女は自分のバッグの中をゴソゴソとあさり始めた。
「あった！！これ私の一番大好きなもの。白井さんにあげる！」
そう言ってあたしに手渡したのはちっちゃな可愛らしいパッケージに入ったチョコレート。
「ありがとう。じゃあまたね。」
「仕事頑張ってくださいね。明日また！」

ふふ、なんだか不思議な人だったな。突然現れて、初対面であんなにフレンドリーで。おまけにこのチョコレート、これが今年唯一のあたしのバースデープレゼントだなぁ。。。ちょっぴりほろ苦い味のする彼女のくれたチョコレートをかじりながら、帰り道そんなことを思った。

「おはようございま～す。」
「おう、白井おはよう！」
次の日の朝。今日も一日仕事がんばるぞっと心の中で気合を入れた。
すると廊下のずーっと向こうからこちらに向かって大手を振って走ってくる人物が見えた。
だんだんこっちに近づいてくる。ん？誰だろう？・・・・！
「みゆ～～～！！！昨日はほんっとにありがとう！」
そう言ってあたしに抱きついてきたのは、昨日突如現れたあの如月まさき！
「おはよう、みゆ！」
「おはようございます。あの、昨日のことはともかく、社内では下の名前で呼ぶのやめてくれます？」
「あ、ごめんごめん。じゃあ白井さん。今日ランチ一緒にいこ！」
「ん～、今日は何にもアポイントないし、、、いいよ。」
「やっほ～！」
ほんとにこの人、見かけはクールなキャリアウーマンという感じだけど、仕草はまるで少女、というより少年だな・・・。
スラっとした身を翻し、かっこいいモノクロのパンツスタイルでキメている彼女の後ろ姿を見ながら、また如月ワールドに飲み込まれてしまった、そんな感覚だった。

「何食べるぅ～～？白井さん。あ、今はオフだからみゆ、って呼んでいいよね？」
「それはかまわないけど。如月さんは何食げるの？あたしはどうしようかなぁ。」
カフェのテーブルに広げられたメニューを眺めながら、たくさんのおいしそうなランチの中でなかなか決められなくて悩んでしまうあたし。
「みゆ、わたしのこともまさきって呼んで。なんだか苗字で呼ばれ

ると硬すぎるよ。ね～、まだ決まんないの？みゆはけっこう優柔不断なんだね。メニュー決められないなら私が決めてあげるよ。これでいい？」
あたしが返事するのを待つこともなしに、彼女は素早くウェイターを呼んで注文をした。
「私さ～、昨日のみゆのプレゼン聞いて、ほんとに感動しちゃったよ。さすがだな～って。私は営業部でまだまだ未熟だからさ、昨日みたいにみゆと一緒に仕事できたら、きっとすごくいい仕事ができると思う。みゆから学びたいことといっぱいあるし。それにみゆとはプライベートでも親友として付き合いたいな。みゆ、いいでしょ？」
たしかに、社内では仕事上での信頼できる仲間はいるけど、彼女のようにすべて包み隠さずフレンドリーにできる関係っていないなぁと思ってしまった。
「そうだね。仲良くしよ。ところで如月さん」
「まさきって呼んで！」
「あ、そっか。まさき…、まさきは何でそんなに英語が流暢なの？どこかで留学か何かしてたの？」
「私はね～、今年の夏までずっとアメリカ暮らしだったんだ。１５歳の時アメリカに渡って、あっちで大学まで卒業して、その後もあっちで就職してたの。だから正直、日本語より英語のほうが私にとっては自然に話せるんだよね。こっちに帰ってきてまだ間もないし、なんだかまだ日本の生活にも言葉にも慣れてないよ。」
「じゃあなんで日本に帰ってくること決めたの？アメリカの方がまさきのスタイルには合ってるんじゃない？」
まさきのような性格だったら、周りを気にしながらお世辞や表面上のつきあいが当たり前の日本では息苦しいのでは？と本音でそう思った。
「父さんが突然亡くなったんだ。」
「え・・・そうだったの？」
常に明るく振舞う彼女の顔が一瞬くもった。

「11年間アメリカにいて、親孝行も何一つしてあげてなかったのにさ。突然逝っちゃうなんてあんまりだよな。母さんは私にまたアメリカに戻れって言ってるけど、父さん死んで今一番悲しいのは母さんなのに、母さん一人残して行けないよ。それでアメリカの家とか荷物とか全部片付けて、こっち戻ってきた。今は母さんと2人で暮らしてる。せめて母さんがほんとに元気になるまで、私が支えてあげなきゃね。」

すべてを自分のペースに巻き込んで、周りを一切気にしないというイメージの彼女が、親のことを心から大切にしている姿、それにはっきりと自分の考えや生き方を持って強く生きている彼女に、あたしは心から尊敬の眼差しを彼女に向けた。

「まさき、ほんとに偉いんだね。まさきみたいな娘を持って、まさきのお母さんきっとすごく幸せだと思うよ。」

「ありがと、みゆ。そう言ってもらえると少しラクになる。」

「あたしなんていまだに両親の世話になりっぱなしで、28歳にもなるのに自分一人でそんなに強く生きたことなんてないよ。」

「みゆ28なの？私の2つ上？ずっと私の年下だと思ってた。」

「・・・ほっといて！」

「ねぇ、もっとみゆのこと聞かせてよ。みゆのこといっぱい知りたい！みゆの両親は何してるの？」

「あたしの父はある企業の会長やってる人で、父も母もとっても世間体とか重視する人なの。だから今までずーっと親の言われたとおりにやってきたつもり。両親は自分の会社であたしを働かせたかったみたいだけど、あたしは自分の力でやってみたいことがあって、それだけは自分の意思で今の会社に働くことに決めたんだ。だからあたしの今やってることに両親はあんまりよく思ってないみたい。」

「そうなんだ。でもすごい人なんだね。みゆの両親って。」

「そんなことないよ。娘をいつも想ってくれてる普通の親だよ。」

「で、みゆは彼氏いるの？」

「あたしの彼も両親が見つけてきた人で、父の会社の人。両親は早

く結婚しろ～ってうるさくて。彼はあたしのこと大事にしてくれてるし、あたしも彼のこといい人だって思ってるけど、彼の仕事が忙しくて、なかなか一緒にいる時間がつくれないんだ。今も出張中で、週末まで帰ってこないの。だから結婚っていう気にはまだなれないな。」

「そっか～。でもみゆのことしっかり愛してくれてるんだったら今はそれでいいじゃん。」

「まぁそうだけどね。そうだ、まさきは彼氏いるの？」

「私はいないよ。今はまったく男に興味なし！結婚なんて煩わしくて一生しないかもな。今は仕事が一番大事だし、楽しいし、やりがい感じてるからね。」

そう言って彼女は食後のコーヒーを一気に飲み干した。

昨日初めて彼女に出会い、おおざっぱであたしとはまったく正反対の理解不能な存在だというイメージだったのに、今日のこの短い時間の中で彼女と話しながら、なんだか彼女がすごく近く、親しい存在に感じた。

それ以来、会社の中で彼女は毎日あたしに会いにくるようになった。あたしも彼女と出会ってから社内で頻繁に彼女のことが目に付くようになった。

顧客相手に流暢な英語で接待、営業をしている彼女の姿は、とてもクールで美しくて、女性の誰もが憧れてしまうようなかっこいいキャリアウーマン。そんな彼女の仕事ぶりにいつもあたしは見とれてしまう。

一方、あたしを見つけたときの彼女、あたしと一緒にランチを食べてるときの彼女は、仕事中のクールさなんて微塵もない、少年がはしゃいでいるような満面の笑顔。あたしがつまらなそうな顔をしている時はあたしの顔を覗き込んで、くだらない冗談であたしを笑わせてくれる。

彼女と話していると、小さな悩みやつまらないことなんてどうでも

いいって思える。ただ単純に彼女と一緒に過ごす時間がすごく楽しいと感じていた。

「みゆ～！こっちだよ。」
「翔！ごめん、待った？出張ご苦労様でした。ふふ。」
「みゆちょっと痩せた？俺のいない間メシちゃんと食ってたか？」
「そんな1週間会わなかったぐらいで大げさだなぁ。でもちょっぴり寂しかった。」
「ごめんな。みゆの誕生日も一緒にいてやれなくて。今日はみゆの行きたいとこ全部付き合う。」
「ほんと？やった！」
松江翔。３０歳。１８０ｃｍの長身で細身。気取らない服装。出会いは親同士が設定したお見合いだったけど、お互い気が合って、今はあたしにとってとても大事な人。彼の仕事が忙しくて一緒にいる時間が少ない分、こうやってゆっくりデートできる時間があたしにとってはすごく貴重な時間。彼にあんまり会えなくてほんとはすごく寂しいけど、彼はあたしの父の会社ですごく重要な役目を果たす位置で、父も彼をとても信頼して会社のすべてを任せているから、あたしはどうしても仕事を優先する彼に何も言えないし、むしろ彼にはもっと仕事に集中してほしい。
「なに？あれで泣いてんの？」
「だって…あの映画ほんとに感動したよぉ。」
「あれ一応コメディだぞ。それに感動して泣けるヤツの方がすげーな。みゆほんと可愛い。」
「ねぇねぇ。あたし前から靴買いたいって思ってたの。靴屋さん寄ろう？」
「はいはい。どこへでも…。」
彼はあたしの甘えやわがままを何でも聞いてくれる。彼に寄りかかっていると、あたしの全てを包み守ってくれる、そんな安心感がする。

「ほんとにいいの？この靴買ってもらっちゃって。」
「みゆが気に入ったならそれでいいよ。誕生日何もやってなかったし。」
「ありがとう！」
「どういたしまして。おっ、もうこんな時間。そろそろ帰るか。」
「もうそんな時間？ねぇ今日翔のうちに泊まってっていい？」
「今日はやめとこ。お前の服とかも持ってきてないし、一日外に出て、明日また出勤なんだから今夜はゆっくり休めよ。俺も帰って残ってる仕事やっちゃいたいし。」
「そっか。わかった。。。」
「そんな顔すんなよ。みゆはほんとに俺がいないと駄目だな。また今度一緒にゆっくり過ごそ。」
そう言って、彼は優しくあたしにキスをした。
また今度って、いつになるんだろう。そう思っても、彼の優しい口調とキスで、あたしは何も言えなくなってしまう。

「白井さん、おはよ！」
ぽんっとあたしの方を叩いたのは如月まさき。
「週末どうだった？彼に会えた？」
「うん。一緒に買い物行った。」
「にしてはなんだか冴えない顔してるな。彼となんかあった？」
「別に何も。デートは一応楽しかったよ。」
「ならいいけど。」
彼女はあたしの顔を怪訝（けげん）に見つめながらそう言った。あたし無意識にそんな冴えない顔してたかな。彼女には何も隠せない気がする。
「あ、部長おはようございます。」
「おう白井。そういえばさぁ、白井は英語少しはできるのか？」
「え、えっと…。全然。。。」
「やっぱりな。最近欧米の顧客が急に増えて、秘書のお前も少しは英語ができないと仕事に支障がでるぞ。これから英語を少し勉強し

たほうがいいな。」
「それなら私が白井さんに英語を教えます。」
あたしの隣からいきなり顔を出したのは如月まさき。なんだか目が輝いている。
「君は？あ～営業部の新しいのだろ？英語がペラペラだったよな。じゃあ頼む。白井、これから勤務中一時間ぐらい使っていいから、英語ならってこい。」
「は、はい…。」
「任せてください！部長！」
如月まさきはいつもよりも更に生き生きした様子で答えた。
彼女との接点がまた増えたあたしは、なんだか嬉しいとも煩わしいとも言えぬ、とても複雑な心境。
これから毎日彼女との時間が増えることを思うと、一体この先どんなことが待ち受けているのか、あたしにはまったく想像できなかった。

唐突な出会い（後書き）

古月ひなこです。
このたびは私の作品を読んでくださり、誠にありがとうございます。
私自身同性愛について書くのは初めてですので、この方面でのご経験が深い方には不快に思われる部分が多々ありましたことをお詫び申し上げます。
ただこの作品は人物、環境においてはフィクションですが、実話に基づいて書いたものですので、主人公の描写はリアルなものになっております。是非お楽しみください。

2つのキス

「I'm sorry to have kept you waiting. Please sit down.」
「アイム ソーリー、トゥハヴ・・・・・・・」
あぁ～～流れるようにきれいな発音で英語を話すまさき、それに比べてあたしの発音は…。なんて聞き苦しいの？こんなんでほんとに英語しゃべれるようなるのかなぁ。
「みゆ、まだ始まったばかりだよ。大丈夫、みゆならできる！」
まさきから英語を習うことになって一週間が経ったけど、英語を改めて勉強するのなんて高校生の時以来。まったく自信なんてない…。
「よし！今日はここまで。ランチ行こ！」
「ありがとうございました。まさき先生。」
「っふふ。みゆは英語なんてできなくても十分優秀だけど、私はやっぱりみゆと英語でコミュニケーションとれるようになったら感激だな。だから根気よく一緒にがんばろ。」
そっか。彼女にとっては英語を使う方が自然なんだよね。なんだかあたしとは世界がまったく違う気がする。

あたし白井（しらい）みゆは性格が全く正反対の如月（きさらぎ）まさきと突然出会うことになって、あれからもう半月が経っていた。この短い期間の間に、あたしとまさきは毎日毎日顔を合わせることになり、まさきがまるでずーっと昔から付き合っているあたしの親友のような、そんな感覚に陥っていた。あたしがまさきに出会う前、まさきのいない以前のあたしの生活がどんなものだったのかさえも忘れてしまうくらい、まさきはこの時すでにあたしの中でそれほど大きな存在になっていたのかもしれない。
そしてあたしたち2人の様子は、同僚の目にも同じように映っていた。

「みゆさ～、なんか最近あの子といつも一緒にいるよね。あなたたちなんでそんなに仲がいいの？」
まさきとランチを終えて戻ったあたしの顔を見るなり、不満そうにこう尋ねてきたのは永田あさみ。あたしと同じ時期に入社し、仕事のパートナーとして一緒にやってきた、社内では一番あたしの信頼できる同僚。
「まさきはね、営業部の子で、英語がすっごく上手なんだぁ。最近彼女から英語教わってるの。帰国子女だからかな～。性格がちょっと変わっててすごくオープンだから一緒に話してるとすごく楽しいの。そうだ！今度3人で一緒にごはんいこうよ！あさみにもちゃんとまさきのこと紹介するね。」
「あたしは遠慮しとく。なんかああいう子ちょっと苦手。ガサツで、周りを一切気にしない感じで。それに女のかけらもない感じ。他の人も言ってるよ。あの子男みたいって。みゆが一緒にいるような子じゃないよ。」
あさみがまさきにそんなイメージを持っているとは思わなかった。確かにまさきは他の女の子よりサバサバしててボーイッシュなところがあるけど、だからって、彼女の人柄が悪いわけじゃない。まさきは仕事に対しても自分の家族に対してもとても誠実で一生懸命なのはあたしがよく知っている。あたしはそんな彼女のことをとても信頼してるし尊敬さえしてる。
まさきと接したこともないのに、まさきのことを悪く言うあさみの言葉に、あたしはとても不愉快な気持ちになった。入社当時からあさみのことを嫌だと思ったこともけんかしたことも一度もなかった。あさみはあたしの一番の通じ合える同僚だ。
でもこの時初めてあさみに対して憤りの気持ちを覚えた。
「白井、忘年会の出し物何やるか考えたか？今年は海外からのお客さんも多いから、恥はかけないぞ。」

そういえばこの年もあと半月で終わりを告げる。この時期は決まって会社中で忘年会の準備に追われるのが恒例となっていた。
忘年会といってもうちの会社は大企業で、数百人が参加するかなりの大規模な立食パーティ。今年は海外の顧客も招いてと言うことになると、更にすごいパーティになりそう。
「そうだ。例年にも増して海外の客が多いし、ここは日本の伝統を見せてやらなきゃな。白井、お前日本舞踊やってただろ？出し物はそれにしよう。外人さんたち喜ぶぞ～。」
部長は自分の提案に大満足な顔をして仕事に戻っていった。
日本舞踊は小さい頃から習っていたけど、あの大人数の前で披露するのはちょっと地味だしかなり緊張するな…。
もぅ部長、人のことだと思って簡単に決めるんだから！

同僚のあさみが言っていたこと、仕事中何度も何度も頭をよぎった。まさきへの評価が高いのはあたしだけなの？普通の女の子から見たら、やっぱり彼女は異質な存在なのかな？
ううん。でもあたしの目に映る彼女はあさみが思ってるような子じゃない。他の人たちが知らないだけなのよ。
あたしは強くそう思い込もうとした。そして自分のまさきへの見方をもう一度確かめたくて、いつもは彼女があたしをランチに誘ってくるところを、今日はあたしが営業部に顔を出して彼女を誘った。
「まさきランチ行こ。」
営業部の部屋に入って彼女のデスクを覗き込んだ。デスクの上には大量の資料が乱雑に積み重ねられ、その横には彼女のパソコンや携帯が無造作に置かれている。常に整頓されているあたしのデスクとは似ても似つかない。
ここがまさきの仕事場かぁ。いつもは彼女があたしを訪ねてくるので、この日初めてまさきのデスクワークの様子を見た。
「みゆ～！そっちから来てくれたんだね。みゆが来るならもうちょっと片付けておけばよかった。」

「そんなに気にしなくていいよ。ねぇランチ行ける？」
「ごめん、みゆ。今日は行けないんだ。忘年会の準備に追われてて。しばらくはみゆとランチに行く時間がないかも。でも私の出し物すごいから、楽しみにしててよ。」
「え～まさき何やるの？」
「内緒。それよりみゆは何かやるの？」
「うん…。日本舞踊。あんまり乗り気じゃないけど。」
「日本舞踊！？着物着て静かに踊るヤツ？みゆすごいな！みゆの着物姿きれいだろうなぁ。楽しみにしてるよ！」

まさき、忘年会で何を披露するのかな？まぁそんなことより、今日はせっかくあたしから誘ったのに。まさきから断られるなんて。まさき忙しいんだな。なんだかちょっと残念…。まさきといろいろ話したい気分だったのに。
もう他の子たちも外に出ちゃってるし、今日は一人ランチかぁ。
プルルルル…ちょうどその時着信音が鳴った。
「もしもし、翔？どうしたの？」
「みゆ、メシもう食った？まだなら一緒に行こう。今ちょうどみゆの会社の近くにいるんだ。」
なんというナイスタイミングなの、この人！彼氏の松江翔（まつえしょう）とお昼休みを一緒に過ごすなんてとっても珍しい出来事。
さっきまでの憂鬱な気持ちが、翔に会える、ただそれだけのことですべて吹っ飛んだ。
そうだ！いつもまさきと一緒に行ってるあそこのお店に翔を連れて行ってあげよう。

「ねぇおいしい？」
「んん。けっこううまいな。ここいつも来てるの？」
口をもぐつかせながら翔は答えた。
「でしょ～？いつもまさきっていう同僚と来てるの。まさきはいつ

も辛味の効いたスパゲティ食べてるんだけど、それもすごくおいしいのよ。」
「へぇ～。まさきって初めて聞いた名前だな。新しい子？」
あたしは翔に会うたびに会社での出来事や同僚のことについて話すので、翔はあたしの職場の様子についてだいたい知っている。
「まさきは営業部の子で、英語でいつも外人さんとやり取りしてるの。アメリカからの帰国子女なのよ。あたしもまさきに英語習ってるの。あたしもあんな風に英語が流暢に話せたらなぁ。」
「え！みゆが英語？やめとけよ～～。無駄な苦労するだけだぞ。それに今までだって普通に仕事こなしてきたじゃん。そんなスキル必要ねぇだろ。それに相手の子にも迷惑だよ。」
「何よ！あたしが英語勉強して何がおかしいの？うちの会社はこれから英語が使えないとやっていけないんだから。それにまさきは迷惑なんて思ってないよ。あたしの勉強見てくれるってこころよく引き受けてくれたの。まさきは何に対しても一生懸命で、あたしにも絶対できるって言ってくれてるんだから！」
「ふ～ん。なんかすごい信頼してるんだな、その子のこと。まぁがんばれよな。」
「うん！今度翔にもまさきに会わせてあげるね。すっごく面白い子だから。」
あたしの話の途中で、翔が思い出したように言った。
「そうだ、みゆ。イヴの夜仕事早くあがれそうだから。」
「ほんと！？やった～～！！ねぇお泊りしていい？」
「もちろん。っていうか声がでかすぎる！」

あっという間に翔との時間が過ぎ、クリスマスムードが漂う街の中を翔は去っていった。
普段あんまり会えないあたしたちだけど、翔はちゃんとあたしとの時間を作ろうとしてくれてるんだ。今日はそんなことをつくづく感じて、何とも言えない幸福感に、自然と顔が緩んだ。

その日からまさきは何だかすごく忙しそうで、一緒に食事することはおろか、英語を教えてくれる時間も2，3日に一回のペースとなった。
「まさき、最近忙しそうだね。なんだかあたしのために時間裂いてもらうの悪いよ。しばらく英語の勉強お休みする？」
あたしからもこんな風に提案してみた。でも彼女は、
「みゆ、ごめんね。みゆとの時間は少なくなるけど、悪いなんて思わないで。私は好きでやってるんだから。忘年会終わったらまた毎日英語やろ。それより忘年会の準備に力入れてるから、私のＳｔａｇｅ（ステージ）楽しみにしててよ。」
彼女もまた、あたしとの時間を煩わしいとは思っていないようだった。
それにしてもまさき忘年会で何やるのかな？とっても気になる…。

１２月２４日、日本中の恋人たちがウキウキするこの日。あたしも例外なく、朝からウキウキ！
この日の仕事が終わったら、翔の家に直行するつもり。お泊りセット持って。
「みゆ！Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ！！今日はいつにもなくご機嫌ですけど？彼氏とデート？」
「ふふ、まさきは何でもあたしのこと見通せるのね。」
「こんな可愛い彼女とクリスマスを一緒に過ごせるなんて、みゆの彼氏はなんてうらやましいヤツ。彼との時間ごゆっくりね～。あさっての忘年会、みゆの晴れ着姿楽しみにしてるよ～～！」
まさきはそう言ってそそくさと去っていった。
まさきのこういう一言があたしの心をくすぐる。普通の女同士の会話なら何でもないはずなのに、まさきに可愛いと言われる度に、嬉しいような恥ずかしいような、不思議な感覚。

「お疲れ様でーす！」
いつもより早く仕事をあがったあたしは、一目散に彼の家へ。合鍵を使ってドアを開けると、久しぶりに香る彼の匂い。
翔の仕事が終わるまでまだ少し時間があるから、翔の部屋、片付けてあげよう。クリスマスの飾りつけもちょっとしてみたりして。何だか心が弾んだ。彼の奥さんになったら毎日こんな感じなのかな。なんてことを考えたりして。
彼は比較的きれい好きなので、部屋の中は目立った乱れはなく、見た目にはしっかり整理整頓されていた。でもクローゼットを開けると、脱ぎっぱなしたワイシャツやスーツが何着も無造作にハンガーにかけられていた。隣に目を移すと、洗い立ての洋服やタオルが畳まずにそのまま放り込んである。
もぉ。きれい好きと言っても、やっぱり男の人だな…。何でも完璧な彼だけど、洋服だけは上手く畳めない彼。こういう所がちょっと可愛いと思える。
これらの洋服を片付けて、持ってきたキャンドルやランチョンなどで部屋を飾ると、あたしは彼との待ち合わせのレストランに足を向けた。

彼は前もって予約してくれていたお店にすでに到着し、あたしを待っていた。彼の部屋を片付けるのに夢中で、結局彼の方が早く着いてしまったみたい。
「ごめん、待たせちゃった？」
「みゆ。俺も今来たとこ。お疲れ！今日は仕事どうだった？」
いつもの優しい口調。彼の顔を見ていると、仕事での煩わしいことなんて全て忘れられる。次はいつ会えるかなんて今は考えないで、今の彼とのこの時間を大切にしよう。
おいしい料理に舌鼓しながら、彼とのたわいのない会話。仕事で疲れた心がみるみるうちに和んでいった。
すると突然彼は顔の表情を変え、大切なことを切り出すように改ま

った。
「みゆ、これ。」
そう言ってあたしの前に小さな箱を差し出した。これって？もしかして？
無言でそれを受け取ったあたしは、ゆっくりそれを開けてみた。それは婚約リングだった。
「なんかドラマみたいだね。いつの間にこんなの用意してたの？」
「もうちょっと驚けよ。俺たちまだすぐに結婚って訳にはいかないけど、一応結婚意識して付き合ってるわけだから、これぐらいはしとかないとな。これ毎日つけてよ。そしたら誰にもみゆを取られないだろ。」
「誰に取られるっていうのよ！馬鹿だな、翔は。」
口ではそう言いながら、あたしの心の中は涙が出るほど嬉しくて感動していた。
波打った形のプラチナリングに小さなダイヤが真ん中に埋め込まれたシンプルなデザイン。波の形には、留まる事のない海の波のように「永遠」に続く、そんな意味が込められている。彼はそう説明してくれた。

その夜。きれいに片付けられた彼の部屋に戻ると、彼は思いのほか感動してくれて、まだ話し続けているあたしの口をキスでふさいだ。あたしを抱き上げた彼はそのままベッドへ。
細身なのに力強い彼の腕に抱かれて、髪の毛の一本一本まで愛されている、そんな夢のような一夜が刻々と流れていった。

「Ｌａｄｙｓ　ａｎｄ　Ｇｅｎｔｌｅｍｅｎ！　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ．．．．．」
彼とクリスマスの夜を過ごしたあの余韻からまだ醒めていない２日後。うちの会社の忘年パーティは開催された。
確かに今年は例年よりも参加人数が多く、海外の顧客の人数も圧倒

的に多かった。
あたしはこの日のために母から借りた、シックで落ち着きのある赤の大きな花柄のついた着物を身にまとって、舞台裏で高鳴る胸を落ち着けていた。
この人数の前で日本舞踊を披露することになるとは。今さら後悔する思いと、ただならぬ緊張感に押しつぶされそうになりながらも、外人さんが多いわけだし、ちょっとぐらいヘマしても大丈夫、それにみんな食事や話に夢中でまじまじと見てる人なんていないんだ、と必死に自分に言い聞かせ、舞台に上がった。
ところが踊り始めると、案外外人さんのノリが良いせいか、和気あいあいとしたムードに支えられるように、あたしは軽やかに踊ることができた。
ふと踊りながら会場のほうを見下ろすと、一人じっとあたしの舞台を見つめている人が目に付いた。
それはまさきだった。まさきはちゃんとあたしの舞台を見てくれていた。

「お疲れ〜〜！！みゆ。すごく素敵だったよぉ。」
ようやく大仕事を終えたあたしは、あたしの帰りを今か今かと待っていた同僚のあさみのところへ戻った。
あさみはあたしの好きな食べ物をしっかりキープしていてくれて、すべての緊張がほぐれたあたしはひと時あさみと食事を楽しんだ。
ふと目を移すと、ずーっと向こうのテーブルでまさきが外国人顧客の接待をしている姿が見えた。鮮やかなスカーフと高いヒールのショートブーツをアクセントに、いつものモノクロスーツのスタイルで、相変わらずなクールな身のこなしと、声は聞こえなくとも流れるきれいな英語で話しているであろう彼女の姿に、一瞬あたしの目が止まった。
すると彼女は突然顧客に会釈をし、そそくさと席を外していった。
向かった先は舞台の方だった。

間もなくすると、落ち着いたＢＧＭが一気にビートの効いたテンポの速い曲に変わった。ノリのいい曲が突然流れ始め、パーティを楽しんでいた客たちは、一斉に舞台の方にに目を向け騒然とした。全員が目を向けた先に現れたのは、なんとまさきだった！

さっきの落ち着いたクールな姿とはまた打って変わって、短い髪の毛を少し逆立て、首元に巻いていたスカーフを解き、少し開いた胸元から大きな奇抜なアクセサリーがキラキラ光っていた。

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？？」

マイクを握り締め会場に向けてそう叫んだ彼女は、後ろの生バンドの演奏を率いて、力強い声でロック系の洋楽を歌い始めた。

静かで厳かな雰囲気のパーティが、彼女の歌声で一気にライヴ会場のムードに化した。

あたしもあさみも思わず一緒にノリながら、すべてを忘れすごく楽しい気分で、曲に合わせて全身を動かした。それは周りの人たちも同じだった。まさきの歌声で会場中が一体化した。

「ＴＨＡＮＫ　ＹＯＵ！！！！」

彼女のライヴが終わって会場はまた落ち着きを取り戻したが、醒めやまぬ興奮の色が参加者一人一人の表情から読み取れた。

いつも周りを自分のペースに巻き込んでしまう彼女だけど、これだけの大きな会場をも一瞬にして彼女の世界に取り込んでしまうまさきは、本当にあたしの今までの人生観さえも覆す大きな魅力を持っていた。

すると、ステージを終えて舞台を降りた彼女は、そのままあたしの所に向かってきた。

「みゆ～～！！私のＳｔａｇｅ見てくれた？楽しかった？」

彼女はあたしの肩を抱いて、いつもよりも顔を近づけて話した。あ

たしの隣にいたあさみは、その様子を見てケーキやフルーツを取りに向こうへ行ってしまった。
「まさき、すごいよ！こんなライヴ初めて！歌ができるなんてまさき今まで言ってなかったのに。」
興奮が治まらぬあたしは、心から感動して言った。
「みゆを驚かせたかったんだ！アメリカにいる時バンド組んでて。この半月、みゆのために毎日練習してたんだよ。みゆが楽しんでくれたなら私も大満足！」
彼女の嘘偽りない性格と話し方がほんとに好き。誰の目も気にしない、自分の気持ちに真っ直ぐな彼女が羨ましい。あたしは改めてそう思った。
「ちょっと待ってて。」
そう言って離れていくと、彼女はしばらくしてワインが注がれた2つのグラスを持ってきた。
「みゆ。今日はほんとにきれいだね。」
まさきはグラスを一つ私に手渡しながら、あたしの目をまっすぐに見つめそう言った。
さっきのまさきのライヴで体を動かした時に、あたしの前髪がサイドの方だけ少し落ちてきてしまったのを、彼女は手でそっと整えてくれた。
ワインを一口一口飲みながら、まさきはあたしの耳元でワインの由来や特徴について話してくれた。
「まさきってお酒に詳しいのね。」
「ふふ。アメリカにいる時、バーテンダーやってたからね。カクテルにはもっと詳しいよ。いつかおしゃれで癒しの場になれるようなバーを作りたい。カクテルを一人一人のお客さんに合わせて作りながら、来てくれた人が疲れや悩みを少しでも忘れて、帰る時には笑顔で店を出て行く、そんなバーを作ってみたい。それが私の夢だなぁ。」
ライヴの興奮が醒めやまないのか、それともお酒が入ってるせいか、

まさきは少し赤らめた顔でそう語った。
普段お酒なんてほとんど飲まないあたしだけど、まさきの話を聞きながらワインを口にすると、なんだかとても味わい深いものに感じた。
「みゆにも今度特別なカクテル飲ませてあげたいな。」
そう言って、まさきはまたあたしを見つめた。
そんなまさきの眼差しを受け、自分の心臓の音が外に聞こえるんではないかと思うほど、あたしはドキドキした。それでいて、そのドキドキ感さえも心地よくなるような、まさきの不思議な力にあたしは飲み込まれていきそうだった。
あたしに顔を近づけて話していた彼女は、その時突然あたしの肩を抱き寄せた。
「みゆ。みゆに出会えて今すごく幸せだよ。」
あたしの耳元でそう囁いたまさきは、あたしの頬にキスをした。

・・・・・・！？
あたしは状況が飲み込めなかった。なんでキスなの？？
あぁ、これもアメリカンナイズされた彼女の挨拶？みたいなものかな。なんて自分で思い込もうとした。でもあたしの心は宙に浮いた状態で、まさきがいつ去っていったかも、自分がどうやって家まで帰ったかも分からないほど、あたしの心は上の空だった。

２つのキス（後書き）

〈登場人物紹介〉

☆白井みゆ：２８歳　１６０ｃｍ　５０ｋｇ　Ａ型
　外資系企業で秘書を勤める。会社では仕事の速さと細かさ、協調性、そして５年間の業績を上から買われ、社内では顔となっている。すべてが準備された両親の元よりも、この会社を選んで自分で道を切り開きたいという強さとしっかりした面を持つ一方、プライベートでは優柔不断で頼りない部分が多くおっちょこちょいだが、その面を含め、彼氏やまさきから愛されている。

☆如月まさき：２６歳　１６８ｃｍ　５６ｋｇ　ＡＢ型
　１５歳で渡米し、１１年間アメリカで暮らす。父親が亡くなり、母親と２人暮らし。息子を持ちたい母親の元で育ったため、性格はボーイッシュで自分自身自覚している。自己主張が強く、人の目を気にしない。自分の信じる道に一人真っ直ぐ進むタイプ。ミュージシャン、バーテンダーの経験を密かに持つ。日本に帰ってきてから交際相手はおらず、仕事に熱心に取り掛かるのに生きがいを感じていたが、初めて純粋で一生懸命なみゆに出会い、心惹かれている。

☆松江翔：３０歳　１８０ｃｍ　７０ｋｇ　Ｏ型
　医者の家で育ち、聡明で落ち着きのある性格。両親が家にあまりいなかったせいもあって、料理、洗濯、掃除何でもこなす。ある商社の会長を尊敬し医者の道を捨て入社。彼の娘みゆとの交際も両家公認の中順調。仕事を優先させるタイプだが、みゆとの結婚も真剣に考えている。結婚後、自分は会社に、奥さんは家で子供の世話と家事、といった平凡な家庭を持つのが夢。

☆永田あさみ：２７歳　１５８ｃｍ　４８ｋｇ　Ｂ型
　みゆの入社時からの同僚。仕事の上ではみゆを一番に理解し、親友に近い関係。好き嫌いが激しく、好きな人にはとことん尽くすが、嫌いな人にはとことん冷たい。

☆会社の部長：５５歳
　みゆの会社に勤めて３０年。みゆの上司で、会社の中ではボス的存在。口は悪いが部下に対して隔たりなく、面倒見がいい。

結婚と仕事、２つの選択肢

「昨日はなんかごめんね。」
英語の勉強を始める前にこう切り出したのは如月まさき。
「え、何が？改まっちゃってどうしたの？」
「あの、、みゆにキスしちゃったこと。びっくりしたでしょ？なんか私あの時お酒も入ってて思わず…」
なんかそんなに改まって言われると余計にどうして答えたらいいかわからなくなる。こっちは今まで何事もないように必死に振舞ってたのに。
「あ、あーあー。全っ然～。だってアメリカ人はみんな男も女も関係なく挨拶代わりでしてるんでしょ？もう、まさきはやっぱり完全にアメリカンナイズされてるんだからぁ。」
ちょっとわざとらしかったかな。あたしは昨日のパーティでの出来事、夕べも眠れないほどほんとはすごく考え込んじゃってるくせに、まさきの前ではまるで何も気にしていないように繕った。
「でも昨日私がみゆにキスしたのは、別にただの挨拶とかそういう意味じゃないよ。」
え…？なんかそれ以上聞くと取り返しがつかなくなりそう。もうそれ以上何も言わないで、まさき！
「昨日のみゆのきれいな姿見てたら、ただ単純にみゆに触れたくて、気づいたらキスしてたんだ。」
まさき、あなたはなんてストレートに物事を言う人なの…。あたしはそんな彼女を一体どう受け止めたらいいの？
「あ、あぁそうだったんだぁ。ははは！ところでこの英語どうやって言うの？」
そして、こんなつまらない答えしかできないあたし。どんな反応したらいいのかわからなくて、かなりぎこちない口調でこの話題を振り切った。

イヴの夜、フィアンセの松江翔からもらった薬指のリングを見つめながら、あたしは複雑な心境だった。
でも正直な気持ち、昨日のまさきのキス、あたしは嫌だとは思わなかった。

それから間もなく、会社は年末年始のお休みに入り、しばらくまさきと会うこともなかった。

「明けましておめでとうございます。おじ様、おば様。」
「みゆちゃん、ようこそ、いらっしゃい！白井さんもどうぞさぁ上がって上がって！」
新しい年が明け、あたしは両親とともに翔の家に新年のご挨拶に上がった。翔のご両親から新年をご一緒に、と招待を受けていたのだ。両家が揃うのは初めではないけれど、やっぱりこの緊張感には慣れない。
リビングに通されたあたしは、テーブルの上に並べられたいくつものお重やきれいな盛り付けをされたオードブルにしばらく見とれてしまった。
「さぁ召し上がりましょ。」
日本酒で乾杯した後、翔のおば様手作りのおせち料理をみんなで堪能した。
翔のご両親とあたしの両親、そして翔とあたし。食事の場は和やかに過ぎていった。
そしてたわいのない話題で盛り上がった後、おじ様がおもむろに切り出した。
「みゆちゃんはますますいい娘さんになって。うちの翔もだいぶ一人前になってきたし、そろそろ一緒になる準備もすすめていったらどうだろうね。」
「まったくですよ。みゆもいい加減仕事ばかりに専念してないで、花嫁修業の一つも真剣に取り組まなきゃなぁ。」

あたしの父もうなずきながらそう言った。続いて翔があたしの表情をうかがいながら言った。
「みゆさん仕事で今やりがいを持ってやってるみたいですよ。いつもみゆさんから仕事の様子聞いてます。でも僕としてはやっぱりみゆさんにいつまでも働かせるつもりはないですよ。結婚の段取りが始まったら、みゆさんには仕事なんて辞めて、ゆっくり家のことだけ考えてもらえばと思ってます。結婚後はみゆさんまで社会の荒波に揉まれることはないですよ。男の僕がみゆさんをしっかり養えばいいんだから。」
「まぁ。翔さんはほんとにみゆ想いですこと。頼もしいわ。」
母はすかさずそう言った。
翔？そんな風に考えてたの？結婚後のことなんて、今まで話したことのなかったあたしたち。この時初めて翔がこんな考えを持っているんだということを知った。
確かに翔はあたしのためにそう言ってくれたんだろうけど、一方的にあたしに仕事を続けさせないことを言われたあたしは、何だか少し気分が悪かった。
食事が終わった後、切りのない話で盛り上がっている両親たちを置いて、あたしと翔は庭に出た。
「あたしは仕事に対して苦に思ったことなんてないよ。今やってる仕事はあたしが初めて自分の意思でやっていることなの。ちゃんとやり通すまでは辞められないよ。」
「やり通す、って大げさだな。男じゃあるまいし、女が結婚と同時に退職するのは普通のことだろ。それに俺は、奥さんには家にいてもらって、家事や子供の養育をしながら家を守ってもらう、そして俺は外で家族のために一生懸命働く、こういう家庭に憧れてるんだよ。みゆにもわかってほしいな。」
「なんだかいつの時代の考え方よ、それ。確かにあたしにもいつか子供ができて、家で静かに子供たちと暮らす日は来るんだろうけど、今はやっぱり仕事で大事なものを得たい、そのことしか考えられな

い。今あたし会社ですごく信頼されながらいろんな仕事任されてるの。あたしもそれに答えたいし最後までやり遂げたい。中途半端に辞めたりしたくないよ。」
「みゆは一生働くわけじゃあるまいし、はっきり言うけど、みゆの代わりなんていくらでもいるだろ。それにみゆはまだわかってないみたいだけど、仕事はそんな甘いもんじゃない。いろいろ複雑に処理しなきゃいけないこととか、人間関係とかあるんだよ。これから先そういう事がたくさん出て来た時に、みゆははそういう苦労に耐えられるか？女はそこまで仕事で苦労する必要もないし、仕事に執着しなくていいんだよ。それよりもっと俺たちの結婚とか家庭のことについて真面目に考えてくれよ。」
「女、女って。女が何よ！翔はあたしの仕事への想いなんて何もわかってくれてない！」
あたしは感極まって大きな声を上げてしまった。翔はそれ以上何も言わなかった。あたしも新年早々翔と喧嘩になることは避けたかった。
こんな後味の悪い終わり方で、お正月休みは過ぎ、また元の生活に戻っていった。

「いい正月過ごせた？」
「まあね。まさきは何してたの？」
「わたしはみゆに会えなくて寂しかったよ。ふふ」
まさきとのランチ。久しぶりに聞くまさきのこの口調。本気なのか冗談なのか、あたしをいつもドキドキさせる話し方はまったく変わっていない。
「母さんと久しぶりに母さんの実家に行って来たんだ。」
まさきは休日中、お母さんと一緒におばあちゃんに会いに行って、家族水入らずで過ごしたことを話し始めた。
まさきの家の話を聞きながら、あたしはなんだか心が和んだ。まさきとまさきのお母さんってほんとにきずなが深いなぁとつくづく思

わされた。あたしは自分のお母さんにそんな風に親孝行をしたことがあったかな。自分と母の関係は特に悪い訳でもないけど、まさきの家のようにお互い助け合ってやってきた記憶もない。
そんなことを考え始めると、無意識にあたしの顔は表情を消しているようだった。
「みゆ、どうした？やっぱり正月休みなんかあった？」
相変わらずまさきはあたしの心を見通すように言った。どこか元気のないあたしの様子を、まさきは何も話さなくてもすぐに読み取ってしまう。
そしてあたしは、まさきに優しく声をかけられると、お正月、翔との考え方の違いで、初めてあんなにぶつかり合ってしまったことをまたふと思い出してしまい、まさきにすべてを話したいという思いに駆られた。
「まさき、あたしね。この仕事自分で初めてやり遂げたいと思って始めたことなの。だから最後までしっかりやり遂げたい。」
「うん。みゆは仕事に対してとても真面目で責任感が強くて、みゆの仕事に対する熱い想い、私はよく知ってるよ。毎日みゆのこと見てるから。私はそんなみゆを尊敬してる。」
まさきはいつにもない真剣な表情で言った。
「あたしね、今の自分が会社で本当に必要とされているかどうかはっきりはわからない。でも誰にも代わりができないような、あたしだからこそできる仕事をしたいの。」
「うん。みゆはもうそういう仕事してるじゃん。私さぁ、いつもくだらないこととか言ってばっかだし、全然女らしくないし、大雑把だし、周りからどう思われてるか知らないけど、人を見る目だけはあるんだ。みゆと初めて出会ったあの日も、ビビっと来た。この子は普通の子と違うって。一目見てみゆを好きになった。みゆは会社の中で一番輝いてるよ。私は一番みゆのこと尊敬してる。仕事もみゆみたいにできたらと思ってる。誰もみゆの代わりなんてできないよ。」

まさきの真剣な眼差しを受けながら、あたしは見る見るうちに自信が湧いてくるのを感じた。自分のこういう面をいつも見つめ、認めてくれている存在がいる。ただそれだけで、心から力強いと思った。まさきは翔とはまた違う、あたしを包み込む安心感とそして勇気と元気を与えてくれる存在だと心から感じた。

「今日からここで一緒に働くことになりました、紅野（こうの）りなと言います。よろしくお願いします。」

1月も終わりに差し掛かった頃、突然うちの部署に新入社員が入社してきた。こんな時期になぜ、とみんなから疑問の声が上がっていたが、何やらお偉い様のツテでここにやって来たらしい。

「白井！今日からこの子を面倒見てやれ。紅野くんは将来どの部署に配置するされるかはまだ未定だが、一応お前の横で秘書助手という形でしばらくやってもらうから、よろしくな。」

部長～。相変わらず一方的にあたしの仕事を増やすこの人。あたしのこと信頼して任せてくれるから、ありがたいと言えばありがたいんだけど。

「はーい。あたしは白井みゆと言います。これからよろしくね。」

紅野（こうの）りな、２４歳。ちっちゃな背に肩まで伸びたふんわりパーマの髪。可愛らしい声。それに、以前うちの会社の取引先であった大企業のトップからのツテでこの会社に入社することになったということもあって、周りの男性社員たちからは一目置かれる存在となった。

「白井先輩、この書類はどうやって整理するんですかぁ？」

この日から彼女はあたしの後ろにいつもくっついて仕事をすることになった。

「あ、それはそこにしまって。こっちは後で社長に報告するものだから、こっちに置いておいて。」

「はーい！」

彼女はあたしの言われるがままにテキパキと仕事をこなした。

「Ｈｅｌｌｏ！みゆ。今日は忙しい？」
まさきがいつものように仕事の合間にあたしの所に顔を出した。
するとまさきはすぐに見慣れない顔の子があたしの後ろにいることに気づいた。
「誰？この子。みゆの部下？」
「紅野りなって言います。よろしくお願いします。」
「私は営業部の如月。みゆは素晴らしい先輩だからいろいろ教えてもらえよ～～。」
紅野りなは、初対面で慣れ慣れしく話すこの如月まさきを、初めは冷淡な目で見つめていたが、実は英語を自由に話し、社内では外国顧客を担当しているということ、まさきはあたしの英語の先生であることなどを紹介すると、突然態度を翻した。
「如月さん素晴らしいですね！私もアメリカに留学したことがあって英語が少しできるから、私たち気が合うかも、ふふ。」
彼女は満面の笑顔をまさきに向けた。
「そうかもね。でも私、みゆ以外の人間ってあんまり名前覚えられないんだ。えーっと…こうださんだっけ？」
「紅野です。」
まさきはこの子にあんまり興味を示さないようだった。

それから一ヶ月。紅野りなは仕事の内容をだいたい把握するようになり、あたしの助手としての役割を一人前にこなすようになっていた。
新人を育成することは想像以上の労力を費やし、疲労がたまってしまった一ヶ月となったが、あたしとしては自分のやってきたことを新しい人に伝えていく、このことにとてもやりがいを感じる期間となった。
いつものランチ。まさきもこの新人のことを気にかけているようだった。

「みゆ、最近疲れてるみたいね。あの新人仕事ぶりどうなの？」
「やっぱり1から教えてるっていうのもあるし、若いから仕事以外のことでも教えてることがたくさんあってね。でも一生懸命やってくれてるよ、あの子。」
「ならいいけど。あんまりみゆ自身が疲れすぎないようにね。」
まさきはあたしを心配する表情で言った。そしてちょっと間が開いた後、まさきはまた口を開いた。
「あの子、みゆに対してどう？」
「え？どうって別に。あたしが言うようにしっかり仕事してくれてるよ。」
「ふ～ん。なんかあんまり信用できないな。みゆは優しいから、あの新しいのに親切すぎるけど、部下なんだからもっとこき使っていいんだよ。ああいうタイプはそうでもしないと付け上がるよ。」
「そんな言い方したら紅野さん可哀想だよ。それにこき使うだなんて。最初から思ってたけど、まさきは紅野さんのことあんまり良く思ってないみたいだね。」
「私は他の人がどういうヤツかなんて興味ない。みゆと毎日楽しくいい仕事できればそれでいいんだ。」
ふふ、まさきらしいな、そう思った。

その時突然あたしの着信が鳴った。電話を出ると、それは久しぶりに聞く声だった。
「みゆ、元気だった？今からそっち行っていい？」
お正月以来、大して連絡もしていなかった翔からだった。
「今まさきと食事してるところだけど…。」
「かまわないよ。あの店だろ？俺もそっち行くからなんか注文しといて。」
そう言って、翔は一方的に電話を切った。
「まさき、あの、、今からあたしの彼氏もここで食事していい？」
「もちろん。どうぞ。」

まさきはまったく表情を変えずにそう言った。
突然の展開にあたしは動揺した。お正月あんなぶつかり合いをして、翔の前でどんな顔をして何を話したらいいのか全くわからなかった。それにまさきも一緒に食事しているこの状況。この3人で一体何を話せばいいの!?

「みゆ!」
翔に頼まれ注文した料理が運ばれてきて間もなく、カフェのドアから入ってきた翔は、あたしを見つけると笑顔で向かってきた。
「元気だった?」
翔はあたしの隣に腰掛けながら、あたしの顔を覗き込んだ。
「う、うん。翔、この子が同僚のまさき。まさき、これがあたしの彼氏の翔。」
「松江です。いつもみゆがお世話になってます。」
「如月です。みゆからいつも松江さんの話を聞いてますよ。」
翔とまさきはお互い簡単に挨拶をすると、それ以上何も話さなかった。この奇妙な3人の真ん中で、あたしは必死に共通の話題を探していた。
すると翔が先に口を開いた。
「みゆ、最近仕事どう?なんか疲れてないか?」
まさきに続いて翔まで心配するほど、あたし、そんなに疲れた顔してるかな?確かに最近新人教育の為に、昼間はほとんど自分の仕事ができず、遅くまで残業ばかりしていた。
「最近あたしの下に新しい子が入って、今その子を教育してるとこなの。」
「へぇ〜。みゆが新人教育?なんかみゆの方が教えられてるイメージしか湧かないな。みゆはおっちょこちょいだし、強く言えない性格だしな。」
「もう翔ってば。言いたい放題。」
「新人が入ったってことは、そいつがみゆの後釜ってことだろ?み

ゆ、俺たちの結婚のことちゃんと考えてくれてたんだな。」
「その子が入ってきたのはあたしのことと全く関係ないよ。」
「でもみゆの代わりができるってことだろ？やっぱり俺たちそろそろ結婚どきかもな。俺昨日さぁ、ちょうど同僚に近々結婚するヤツがいて、一緒に結婚会場とか見てきたんだ。やっぱいいよな～。俺も早く落ち着きたいってちょっと思った。」
「そうだったの。」
まさきもいるのに、完全プライベートの話をし始めた翔は、一体何を考えているのかあたしには理解できなかった。あたしはチラッとまさきに目を向けると、まさきは表情一つ変えず、黙々とスパゲティを食べていた。
結婚の話題が出ると、あたしはまた翔とぶつかり合った日のことを思い出した。それと同時に、一方的に結婚のことを話し続ける翔にいても立ってもいられず、あたしは口を挟んだ。
「翔。あたしも結婚には前向きだけど、今はやっぱり仕事辞められない。」
真剣な表情で言い放ったあたしに、翔も笑顔を消した。
「みゆにすぐ仕事を辞めろとはもう言わない。けど、この間も言った通り、仕事はあくまで一時的なもの。お前が辞めても、また別の人が代わりに継いでいくだけだよ。でも家庭のことは嫁にしかできないだろ。みゆはもっと家庭のこと一番に考えるってことを自覚してくれよな。」

やっぱり前回の時と全く変わっていない彼の考えと態度に、あたしはそれ以上何も答えることができなかった。
すると、あたしの前で黙々とスパゲティをすすっていたまさきが突然口を開いた。
「みゆは今会社ですごくみんなから信頼されています。みゆは仕事に対して誰よりも真面目に、責任を持って、誇りを持って頑張ってます。社内でみゆの代わりができる人なんて一人もいないよ。彼女

が今一生懸命打ち込んでる仕事、もっとちゃんと見てあげたらどうですか？」
まさきは鋭い目で翔を見つめた。
翔は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐにまさきを睨み返した。
「如月さんに言われなくても、俺はいつもみゆのこと一番理解してるつもりです。みゆ、仕事を今すぐ辞めろとは言わない。でも俺の嫁になるなら、お前も真剣に将来のこと考えてくれよな。また電話する。」
そう言い残すと、翔は3人分の会計を済ませ、足早に自分の職場に戻っていった。
「まさき、なんかごめんね。せっかくのランチの時間に。」
「全然。みゆの彼氏に会えてよかった。彼氏、あーいうタイプか。みゆのことすごく大事にしてるんだね。でも彼も知らないみゆのいいとこ、私はいっぱい知ってるから。」
まさきは真剣な面持ちのままそう言った。

翔の前で堂々とあたしの仕事ぶりを話してくれたまさきにまた惹かれていく気持ちと、翔を更に不快にさせてしまった険悪な気持ちとが入り交ざり、何となく前途多難になりそうな自分の将来に、あたしは深いため息をついた。

結婚と仕事、２つの選択肢（後書き）

古月ひなこです。
いつも「ＣＲＡＺＹな恋」を愛読してくださり、ありがとうございます。

少しでもご意見ある方、ご感想お待ちしております。
まだまだ続きますので、今後ともよろしくお願いします。

裏切り

「みゆ！なんか手伝おうか？」
如月まさきはそう言ってあたしのデスクに顔を出した。彼女にとって自分の仕事の合間にあたしの顔を見に来ることはもう毎日の習慣となっていた。
「如月先輩～！私たちの仕事手伝ってくれるんですかぁ？」
横からすかさずそう言ったのはあたしの下で働く紅野りな。入社して2ヶ月余りが経つ彼女は、この可愛らしい声と容貌、それに加えて取引先の大企業から送られてきた大事なお嬢様として、入社当時から上司も周りの男性社員からも至れり尽くせりだった。
ただ、そんなひいきを受けている彼女は、女社員からの風当たりは到底良いわけがなかった。そして彼女への冷たい態度は、まさきや永田あさみも例外ではなかった。

「みゆのあの補佐役、バックに何がついてるか知らないけど、入社仕立てでなんかでしゃばりすぎじゃないの？男たちも男たちよ！ちょっと可愛いとすぐ鼻の下伸ばして甘やかすんだから。あの子ちゃんとみゆの役に立ってるの？」
同僚のあさみは、あの紅野りなが入ってくるなり、彼女のことが目障りなようだった。
「まぁね～若いからいろいろ教えなきゃいけないことはあるけど、ちょっと多めに見てやってよ。仕事は彼女なりに一生懸命やってくれてるしね。」
あたしはそう言ってあさみをなだめた。あたしも紅野りなを特別気に入っているわけではないが、一応あたしの指導の下で働いてくれている彼女に対し、あたしまで厳しい目を向けることはできなかった。

そしてまさきもまた、彼女に対して決して良い態度ではなかった。
あたしの横からすかさず顔を出し、まさきに話しかけた彼女に対し、まさきは冷たい口調で言った。
「君に話してるんじゃなくて、みゆに話してるの。それより仕事はちゃんと覚えた？みゆの指導を受けられるなんて君にはもったいないくらいなんだから。しっかりみゆの補佐勤めろよ！えーっと、名前なんだっけ？」
まさきは彼女の名前すらまだ覚えていない。彼女はまさきの前で甘えるように言った。
「紅野りなです。私のことも下の名前で呼んでいいですよ。如月先輩今日もカッコいいですね。そこらへんの男の人たちよりよっぽどカッコいい！」
「私は誰とでも親しくしてるわけじゃないの。君に慣れ慣れしくされる筋合いないよ。みゆは私の親友だから特別なの。」
まさきってば相変わらず言葉をオブラートに包むってことを知らないんだから。それはちょっと紅野さんに酷過ぎなんじゃない？あたしは恐る恐る彼女の顔を見た。
紅野りなは一瞬ムッとした表情を見せたものの、すぐにいつもの可愛らしい顔に戻った。
明らかに周りの女子から冷たくされているにも関わらず、こうして平然と笑顔を見せていられれる彼女もまた、可愛い顔をしてかなりのツワモノであることを感じざるを得なかった。

「白井先輩、これもっとこうした方がいいんじゃないですか？」
「そ、そうかな。じゃあ紅野さんが良いと思うやり方でやってみて。」
この頃から彼女はあたしへ意見することが多くなった。
それでもあたしは、紅野りながこうして仕事のことであたしに意見することは、仕事に対して主体的に取り組もうとしている彼女の表れだと思うことにし、あたしはできる限り彼女の意見を聞き入れる

よう努めた。

「なんだかやり方が不合理ですよ。白井先輩も、こういうやり方で今までやってきて何とも思わなかったんですか？」

紅野りなはこの日もまたあたしに強気の態度で意見してきた。

するとちょうどそこにまさきが顔を出していて、あたしたちのやり取りを見ていた。

「ちょっと補佐！先輩に対してその態度はないだろ。あんたもうちょっとみゆに対して礼儀ってものがあるんじゃないの？」

まさきはかなり強い口調で彼女に言った。彼女は何も言わずに素直にうなずいた。

あたしは彼女に意見されることなど何でもなかったが、それよりもまさきがあたしに対する態度とは打って変わって、彼女にあまりにも冷たく当たることで、彼女が泣いてしまうんじゃないか、それとも仕事が嫌になって辞めてしまうんじゃないか、そのことの方が心配だった。

でも彼女はそんなあたしの心配をよそに、しばらく経つとすぐ何事もなかったかのようにまさきの腕にしがみついて、人懐こく何かを話していた。

その日のランチ。

「みゆ。もっとあの新しいのに厳しくしなきゃ駄目だよ。みゆは立派な先輩でもあり上司なんだから。」

「あたしね、あの子ああいう感じだから女の子からあんまり好かれないタイプなのはわかってる。でもやっぱりあたしの下で働いてくれてるわけだから、あたしは上の立場としてできる限り彼女の仕事のしやすいようにしてあげなきゃって思うの。あたしまで彼女にきつく当たったら彼女の立場がなくなっちゃうでしょ？」

「みゆは優しすぎだよ。まぁみゆのそういう所が私は好きなんだけどね。でもあの子はみゆが思ってるほどひ弱なタイプじゃないよ。

今度みゆに対して敬意を払わない態度取ったら、私がきつく言ってやるから！」
「あんまりストレートにいじめないでやってね。」
「イジメじゃなくてこれは教育。私はみゆが心配だよ。あの新人のことでみゆ自身がいっぱいいっぱいにならないようにな。みゆはもっと自分の能力と立場に自信を持って、堂々としてればいいんだよ。」
「ありがとね。まさき。」
まさきはいつでもあたしのことを一番に想ってくれてる、それだけで、紅野りなが入社して以来の一連のプレッシャーからあたしは一気に解放される思いだった。

「紅野さんって、ほんとしっかりしてるな。そろそろ白井さんより上にいくんじゃないか？」
そんなことが社内の男性社員の中でしきりに言われるようになっていたことを、永田あさみが教えてくれるまであたしは全く気づかなかった。
それでもあたしの味方になってくれる仲間がいることであたしは支えられていた。
それに、紅野りなもあたしに対する態度はどうであれ、一生懸命仕事に取り組んでいる姿に、あたしは信じ、期待したいと思った。

「白井先輩、これあたしがやっておくのでたまには先輩が先に帰ってください。」
この日、紅野りなは一段と仕事に熱心で、帰りも自分が残業するとはりきっていた。やっぱり仕事への想いは彼女も同じなんだなと感じると、やはり彼女を毛嫌いする気にはなれなかった。
「じゃあ今日は先に上がらせてもらうね。紅野さんもあんまり遅くならないでね。」
そう言ってあたしは帰路に着いた。

屋内から外に出たとたん、春がそこまで来ているものの、まだまだ冷たい空気と風が、あたしの背中まで伸びたストレートの髪をそっと揺らした。
何だか新人教育のことについていろいろ考えさせられる期間だったなぁと思いにふけりながら歩いていると、あっという間に地下鉄の駅までたどり着いた。改札口で定期を取り出そうとしたあたしは、自分の財布がバッグに入ってないことに気づいた。
そう言えば、さっき紅野さんに飲み物を買ってきてあげて戻ってきた時、ちょうど大事な電話がかかってきて、とっさに財布をデスクの引き出しに入れたのを思い出した。
あたしってほんとにバカだぁ～と思いながら、あたしは仕方なく会社へ引き返した。

もうひと気がすっかりなくなった会社に戻ったあたしは、自分のデスクのある部屋に入ろうとしたその瞬間、ある人影が見え足を止めた。よく見ると、それは紅野りなだった。
な～んだ、紅野さんまだ帰ってなかったんだ。そう思って部屋に入ろうとしたあたしは、なんだかいつもと違う彼女の雰囲気に再び足を留めた。
彼女は電気もつけずに真剣な表情で書類をまとめるしぐさをすると、何やら一束の書類を素早く自分のバッグに押し込んだ。
只ならぬ彼女の妙な雰囲気に、あたしはそのまま少し部屋から離れて息を殺した。彼女は全くあたしの存在に気づくことなく足早に去っていった。

あたしは何となく彼女の行動が気になり、デスクに戻るとすぐ机の上の書類を確認した。すると、あきらかに数百件の顧客情報がまとめられた書類が消えていた。
あたしは真っ青になって、ありとあらゆる場所を探した。いつもは鍵のついた引き出しに大切に保管しているもので、当然社員が家に

持ち帰ることも禁じられているものだが、どこを探しても見当たらなかった。
あたしは人を疑うということが大嫌いで、ましてや自分の身近な人をそのように思うことなど考えもしたくなかったけれど、どう考えても紅野りなが持ち去った、それ以外に書類が消えた理由は見当たらなかった。
あたしはすぐに紅野りなに電話をかけたが、彼女の携帯はオフにされていてつながらなかった。
とりあえずあたしはそのまま帰宅したものの、その日の夜は一睡もすることができなかった。

もしかしたらあたしの思い違いかもしれないと思い直し、翌日、あたしは早めに出勤をして、もう一度ありとあらゆる場所を探してみた。でも昨日と変わることなくそれは見つからなかった。
「おはよございまーす。白井先輩？今日は早いですね。」
しばらくすると、紅野りなが出勤してきた。この件でまったく眠れない夜を過ごしたあたしとは対照的に、彼女は全くいつもと同じ様子で現れた。
「ねぇ、紅野さん、顧客リストが見当たらないんだけど、知らない？」
「え？ほんとですかぁ？昨日はありましたよね？白井先輩どっか別の場所に置いちゃったんじゃないですか？」
この件についてまったく知らない様子の彼女に、あたしはそれ以上何も突っ込むことができなかった。
まだ何の証拠もないのに、あたし自身が彼女を疑うことはもちろん、他の誰にも言う事はできないあたしは、とりあえずゆっくり落ち着いて探してみようと考え直した。
”心ここに在らず”のランチを過ごしたあたしは、疲れきったあたしを見るなり、何事かと聞いてきたまさきにもこの件のことについ

ては話さなかった。
昼休みから戻ったあたしは、自分の私物が入れてある棚を開けると驚きのあまり言葉が出なかった。そこには昨日からあたしがずっと探していたものが無造作に置いてあった。
紅野りなは後ろからそれを見ていた。
「やっぱり白井先輩がこんな所に入れちゃったんですね。」
この時、あたしは確信した。やっぱり彼女がこれを仕組んだんだって。だってこの場所はランチに行く前まであたしが何度も確認した場所だったから。

彼女はこの顧客リストを家に持ち帰り、一体何をしていたのか。あたしは退勤の時間までずっとこのことを考えていた。
「じゃあお疲れ様でした！」
「紅野さん、ちょっといい？」
5時と同時に帰ろうとする紅野りなを、あたしは即座に呼び止めた。
「顧客リストのことだけど。」
「あれは白井先輩の所から出てきたんじゃないですかぁ。でも見つかったんだしもういいでしょ。」
「でもあたしは昨日からずっと探してたから、あのリストが昨日の時点でなくなったのは事実なの。あたし、昨日あなたが会社に残って、ある書類をバッグに入れてたの見ちゃったのよ。ほんとはあなたが持ち帰ったんじゃないの？」
そう言うと、彼女は少し黙った。
「白井先輩、私のことそんな風に疑ってるの？自分のミスでリストをなくしたくせに酷いじゃないですか！」
彼女は鋭い目つきであたしを睨みつけた。

「あんた、元の会社とグルになって顧客情報盗んだだろ？」
その時突然別の方向から声がした。声の方角に目を向けると、ドア口に立ってたのはまさきだった。

「最初からどうもあんたのこと気になってたけど、あの会社の回し者だったんだな。さっきまであっちの会社に直接行って来て確かめてたんだ。向こうもそのこと認めたよ。」
まさきは午後ずっと、紅野りなをうちの会社に送った、元取引先の会社に直接行って事実を明らかにしていたのだった。
「それじゃあ紅野さんは初めからそのつもりでここに入って来たってこと？あっちの会社のスパイってことなの？」
あたしはこの事実を飲み込むのに必死だった。
「スパイだなんて人聞きの悪いこと言わないでよ！自分の会社が発展する為にはこれぐらいのことするのは当たり前でしょ？子供じゃあるまいし、そんなことで大騒ぎしてバカみたい！」
紅野りなは完全に開き直って言い放った。
「こんなことしてあんたの処分はもう決まってるだろうから、あんたの会社が何しようがあたしたちにはもう関係ないけど、あんたの教育の為に毎日身を削って育ててくれたみゆに対してそういう態度を取るんだったら私が許さないからな！」
まさきは今まで見たことのない鋭く怖い目つきで彼女に怒鳴りつけた。
「白井先輩どうもありがとう！でもあたしもうすでに辞職願出してあるんで、明日からあなたたちとは何の関わりもないですから。」
紅野りなはそう言い捨てるとその場を立ち去って、２度とあたしたちの前に現れることはなかった。

まさきとの帰り道、あまりの信じ難い出来事に、あたしは頭が回らなかった。
あたしにとって一対一で行う新人教育は初めてで、この為にただただ必死にやってきたこの３ヶ月間、自分がどれだけ身を投じてきたか今になってヒシヒシと痛感した。その努力もむなしく、彼女はあたしたちを裏切った。というよりもともと裏があって入ってきた者だとは全く気づかずに、無意味に頑張ってきた自分があまりにも惨

めで、愚かだと感じた。
そう思うと、自然に涙が1粒2粒とあたしの頬を伝わった。
あたしの様子に気づいたまさきは足を止めた。
「みゆ？アイツは酷いことしたけど、もうみゆとは関係ないんだし、もう考えるのやめよ。あんなヤツの為にみゆが泣くことないよ。」
まさきは小さく優しい声であたしを慰めた。
「あたし…、人を見る目が全然なかったね。まさきも初めから気をつけた方がいいって言ってくれてたのに、最後までバカみたいに信じて。彼女がああいうことをするスキまで与えて。彼女がどういう者であれ、あたし自身がしっかりしてれば、こんなこと起きなかったのに、ほんと仕事失格だよ…。」
「自分を責めないでよ、みゆ。これはみゆのせいじゃない。みゆは一番優秀だよ。それは私がよく知ってる。こういうことが起こって、それでもまだ自分のせいだと言ってる、そういうみゆが一番責任感のある証拠でしょ？私はそういうみゆのこと尊敬してるし、すごいと思う。誰でもできることじゃないよ。私はどんなことがあってもみゆの味方だよ。」
まさきの言葉を聞いていると、まるで全てを包み込まれているような温かい感じがして、更に涙が止まらなくなった。
「まさき…ありがと、ね。」
「今日の昼休み、みゆがいつもと違う様子だったし、アイツのことも前々から怪しいと思ってたから、営業に行って来るって言って、アイツの会社の上のヤツに突き止めに行ってたんだ。もっと早くにみゆを守ってあげられなくてごめんね。そんなに悲しい顔しないで。私はみゆの笑ってる顔しか見たくないよ。」
まさきはそう言って、あたしの頬に伝わる涙を自分の指でぬぐった。
まさきの言葉、そして存在にあたしはどれだけ救われただろうか。
あたしを包み込む温かいまさきのオーラにずっと包まれていたい、あたしはそんな風に思った。

翌日、大事件を起こした張本人がうちの会社に現れることはなかった。この事実は部長を通してトップに報告された後、うちの会社は、紅野りなを送ったあの企業とは一切の取り引き関係を絶った。

こんなことがあった週末、翔が久しぶりにあたしをデートに誘った。まだあのショックから立ち直れていないあたしの様子に彼はずっと気づいているようだった。

その夜、食事をしながら、どちらからともなくあたしの最近の仕事のことについての話題となった。

あたしは一連の出来事をすべて翔に打ち明けた。翔はずっと黙ってあたしの話を聞いていたが、最後に口を開いた。

「実際そんな悪い手段使ってのし上がろうとする会社があるんだな。みゆもとんだ災難だったな。まぁもう関係ないんだし、いつまでも考えてたって仕方ないだろ。」

「そうなんだけどね。やっぱり気持ちが晴れなくて。あたしは仕事に対して甘かったなぁってつくづく思ったんだ。」

「だから言っただろ。社会で働くのはそんなに甘いもんじゃないって。だいたいみゆは人の上に立つような性格じゃないし、ムリなんだよ。みゆ、これを機に仕事なんて辞めたら？」

翔は常にあたしが社会に出て働くような人材ではないと、そう思ってる。翔は悪気があってそう言ってるわけではないのはわかってるけど、あたしの仕事上の能力を認めてくれない彼の言葉を聞いてると、何だかとても彼には理解されていない感覚に陥ってしまう。そしてこんな時、まさきだったらどう言ってくれるんだろう、そんなことを無意識に考えている自分がいた。

「翔はなんでいつもそうなの？会社でどんなことがあったって辞める理由にはならないよ。翔はいつもあたしが何もできないって思ってるけど、まさきはあたしが一番優秀だって言ってくれてるよ。」

ついまさきの名前を口にしてしまった。

「まさきって、この前会ったヤツ？外のヤツはみんな褒め言葉しか

言わないんだよ。俺はみゆが何もできないなんて言ってない。だた俺と一緒になるのに、何も外でそんなに苦労する必要はないって言ってるだけだよ。みゆは男みたいにバリバリ仕事やりたいのか？女の子はそこまでしなくていいんじゃないの！」

「バリバリ仕事したいとかそういうことじゃなくて、あたしは自分の可能性を見出したいの。会社の中でどこまで自分の役割を果せるかやってみたい。まさきはそれを全部理解してくれてる。翔はなんでそれがわからないの？」

またもや感情的になってしまったあたしの態度に、翔も不機嫌な顔をした。ううん、違う。あたしの態度に、というより、あたしが何かとまさきの名を出すことに腹を立てたようだった。

「その、まさきってヤツは俺よりみゆを理解してるってわけ？」

完全にまさきに怒りの矛先を向けた翔の様子に気づいて、あたしはまさきの名を翔の前で出したことを少し後悔した。

翔が少しずつまさきのことを敵対視し始めていることに、この時あたしはまだ気づいていなかった。

裏切り（後書き）

古月ひなこです。
いつもご愛読くださって誠にありがとうございます。

奇怪なダブルデート

スパイがうちの会社に舞い込んできた事件が、ようやくみんなの記憶から忘れ去られようとしてきた頃、あたしの心の傷も同じように少しずつ癒えて、仕事にまた前向きに取り組むことができるようになっていた。
それもこれも、すべてはあたしを支え励ましてくれる存在、まさきがいつもいてくれるからだった。

でも、そんなあたしの様子を良くない思いで見つめる存在もいた。
それは紛れもなくあたしのフィアンセ、翔だった。
翔はあたしの知らないところで、まさきがどんな人物かを探ろうとチャンスを狙っていた。

「Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｔｏｄａｙ？みゅ～～！　Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ？」
今日もいつものようにまさきがあたしの様子を見に顔を出した。
まさきは社内で顔を合わせた時やランチの時、こうやって何気ない一言であたしの様子をうかがう。
それはアメリカ人が誰に対しても挨拶としてかける一言なのか、それともほんとにあたしのことに関心を持って話しかけてくれる一言なのか、あたしにはまだわからない。
でもそうやって、あたしがいつでも自分の状況を話せることができるような環境を作り出してくれるまさきの心遣い、それがあたしにすべての気持ちを共有できる人がいるんだということを感じさせてくれて、この上なく大きな安心感に変わる。

「うん、こっちは大丈夫よ。順調順調！たまにはこういうゆっくりした時期もいいよね。」

あたしの様子を心配そうにいつもうかがうまさきに、あたしは精一杯元気な表情で返した。もうあたしは大丈夫だし、それにまさきをいつまでも心配させたくないから。
会社はあの事件のことからだいぶ落ち着きを取り戻し、多忙期も過ぎて、最近は平和な毎日が続いていた。
そこに部長がいつになく上機嫌な様子であたしたち2人の中に割り込んできた。
「お前たち、映画なんて見るか？実はチケット2枚もらったのがあるんだけど、俺も行く時間ないしさ～、お前たち最近よく頑張ってくれてたから、仕事が落ち着いてる時期に行って来い。」
そう言って部長はあたしにその2枚のチケットを手渡した。
「え～～！？いいんですか？ありがとうございます！」
よく見るとそれは歴史モノのちょっとお堅い感じの映画招待券だった。
部長が去って行った後、あたしとまさきは顔を見合わせ、ぷぷっと笑ってしまった。
あたしは学生の時から歴史がとても苦手で、こういうタイプのものを自分から見たことなんて一度もない。そしてあたしと顔を見合わせたまさきは、あたし以上にどう見てもこういう映画をみるようなタイプには見えない。
「どうせならもうちょっとおもしろそうな映画のチケットくれたらよかったのにな。」
まさきもあたしと同じことを言いたかったんだと思うと、すごくおかしくて思いっきり笑ってしまった。
「ほんと、そうだよね！っはは！」
「みゆもやっぱそう思うだろ？まぁみゆと一緒に映画に行けるチャンスをくれたことだけ有り難く思わなきゃね。部長～～Ｔｈａｎｋｙｏｕ！！！」
まさきは部長が立ち去った方向に向かって、大きく叫んだ。

「みゆ、今度映画付き合ってくんない？」
・・・！？この人まで映画の話題？？
次の日、久しぶりにあたしに会いに来た翔とのランチ。あたしが唖然としたのは、昨日に引き続き今度は翔から映画のお誘いを受けたから。
「これなんだけどさ～。俺けっこう見たかったんだよね、こういうの。」
そう言ってあたしの前に差し出した映画の招待券を見て、あたしはまたまたポカーンとした。
だってそれは昨日部長があたしとまさきにくれたチケットとま全くおんなじモノだったから。
「みゆあんまりこういうの好きじゃないかもしれないけど、せっかくもらったし、息抜きのつもりで一緒に行こうよ。」
翔はこの類のストーリーがとても好きなのは知っている。歴史が大好きで、普段から時代ごとの社会情勢にとても興味があって知識も深い。そのせいか、いつもあたしが選ぶラブコメのような映画を見に行く時より、断然翔の目が輝いていた。
そんなことより、あたしが突っ込みたいのはそこじゃなくて、あり得ない偶然が重なっていること。
そして今あたしの手の中にあるのは全く同じ2枚の映画チケット。一つはたった今翔から渡されたモノ、もう一つはすでに約束されているまさきとのモノ。
どちらを取るべきか…、瞬間的に決めることのできないあたしは、おもむろにバッグの中からまさきと行く予定のチケットを取り出し、2枚のチケットを見比べた。
「実はあたしもおんなじの持ってるの。」
「はぁ！？お前も持ってるの？はは！なーんだ。だったら早く俺を誘ってくれよ。俺がこういう映画好きなの知ってるだろ？じゃあこのチケットは他のヤツにあげるよ。」
翔はそう言ってあたしに手渡したチケットを自分の手元に引き戻そ

うとした。
あたしはとっさに手を引っ込めた。
「あ！あの…。あたしの持ってるチケットの方は、もう他の人とと行くって約束しちゃったの。」
「誰？友達？」
「このチケットは部長があたしとまさきにくれたモノなの。だから…。」
「またアイツか…。」
翔は少し黙り込んだ。そしてグラスのお水を一口飲むと、また話し始めた。
「わかった。じゃあ俺は他の同僚探して行くわ。４枚チケットがある訳だから、４人で一緒にいけばいいだろ？」
「う…ん。・・・？」
曖昧にうなずいたあたしは、この展開を理解できたようなできないような…。
２人の男の子と２人の女の子、一緒に遊びに行くことなんてごく普通のことなんだろうけど、あたしとまさきと翔、この３人が揃うことはなんだか普通でない何かが起きそうな、あたしはそんな予感と不安に襲われた。

会社に戻ったあたしはすぐにまさきにそのことを話した。
「そっか。みゆの彼氏も来るんだ。ん～私は別にかまわないよ。みゆの彼氏が一緒だろうが何だろうが、みゆと一緒に映画に行けることすごく楽しみにしてるから。」
まさきは戸惑う様子もなく、あっさり了承した。
結局こんなにドキドキしているのはあたし一人だけ。まさきと翔は別に何とも思ってないのかな…。あたしだけがこんなに戸惑ってバカみたい・・・。

週末、映画を見に行くことになっている当日、あたしとまさきは会

社の前で待ち合わせをして、２人で目的地に向かった。
「みゆ、今日はすっごく可愛い！」
職場ではいつも落ち着いた地味なカッコしかしていないあたしも、やっぱり嫁入り前の女の子。こういうオフの時ぐらいは長く伸ばした髪の毛をおろしてカールしてみたりして、きれいな色のワンピース着て、おしゃれを楽しみたい。まさきの褒め上手な口癖もいつもより倍増して、今日は一段と目を輝かせてあたしのおしゃれを褒めてくれた。
まさきの方は相変わらずモノトーンの色合いでキメているけど、ショートの髪を後ろに流しジェルでクセづけをしている髪型のためか、それとも何気なくカジュアル風になっているオフの服装のせいか、いつもの職場で見る彼女とは少し雰囲気が違って、あたしはなんだかそんな彼女の雰囲気にドキドキしてしまった。
まさきは終始あたしの腕に自分の腕をからませた。

翔との待ち合わせ場所に到着すると、翔はもうすでにその場に着いてあたしたちを待っていた。
翔の隣には見知らぬ男性が一人立っていた。翔も申し分のないルックスだけど、その隣の男性も、背丈が翔と同じくらい高くて、さわやかで、周りの女の子たちがほっとかない、そんな第一印象だった。
「コイツは俺の後輩。で、これが俺の彼女。」
「東俊哉（あずまとしや）です。いつも松江さんからみゆさんのこと聞いてますよ。自慢の彼女だって。俺もこんなきれいな女の子たちと知り合えて嬉しいです。」
ルックスだけじゃなく、甘い口も持ち合わせているようだった。
「こちらはあたしの同僚の如月まさきさんです。こちらこそよろしく。」
あたしもまさきを彼らに紹介すると、まさきは軽く会釈をした。
「じゃあさっそく映画見に行こう。」
翔はそう言って、あたしたちはそこから映画館まで歩いて向かった。

東俊哉はその間、何かとまさきに話しかけた。
「如月さんってなんかサバサバしてる感じですね。なんかこういうカッコいい感じの女の子、僕好きなんですよ～。如月さん彼氏いないの？」
「私は今すごく仕事に充実してるんです。今のところ彼氏はまったく必要ありません。」
まさきはきっぱりと言い切った。
翔がまさきと東俊哉をくっつけようとして彼を連れて来たのは見え見えだったが、まさきが一切あたしの隣から離れようとしないので、少しだけ不機嫌な表情に変わった。
そこに追い討ちをかけてまさきが言葉を発した。
「みゆ、ほんとに今日は可愛いね。松江さん、今日のみゆの姿、一段と可愛いと思いません？？」
「俺はいちいち言葉に出さなくても、コイツのいろんな可愛いとこ見てますから。」
翔はすかさずそう答えた。
「でも女の子はやっぱり言葉に出して言われた方が断然嬉しいですよ。」
翔は黙ってしまった。
見えない火花が翔とまさきとの間でパチパチと燃え始めているのに、あたしはまだ気づいていなかった。

映画館に着いたあたしたち４人は、定番のポップコーンと飲み物を買って中に入った。
今日見る映画は男２人が好きな類のモノということで、座席は翔と東俊哉が前の２席に、あたしとまさきが後ろの２席に座った。
映画が始まると、あたしは歴史のことがちんぷんかんぷんなので、分からないことがあるたびに前の座席に座っている翔に解説を求めた。
「ねぇ翔、なんでこの人、あの人たちを殺そうとしてるの？」

小声でこっそり聞くあたしに、翔もまた小声でこっそり教えてくれた。
でもさすがにそれを4，5回続けていると、翔はせっかくの映画に水を挿され、あたしの質問なんか気にせず、映画に集中してしまった。

しばらくあたしは黙ってスクリーンを見続けていると、隣からまさきが顔を近づけてきた。
「みゆ、つまんないだろ？もっとおもしろいの見にいこ。」
まさきはそう小声で囁くと、あたしの返答も待たず、ぐいっとあたしの手を引っ張って部屋の外に連れ出した。
あたしはまさきが一体今から何をしようとしているのか、まったく理解ができずまさきに手を引かれるがままに足を動かした。
「どれがいいかな。あっ、ここにしよ。」
そう言ってまさきが足を止めた場所は、あたしがすごく見たかった映画が上映されている部屋の前だった。まさきはあたしの手を再び引っ張って部屋に入った。
一番後ろの一番端の席に腰掛けたあたしたちは、もう半分くらい過ぎたラブコメを鑑賞し始めた。
なんだかこんなの初めてでドキドキしているあたしの様子を見て、まさきはまた小声で囁いた。
「みゆ、びっくりした？私、学生の時しょっちゅうこんなのやってたから平気なんだ。やっぱり自分の好きなモノ見た方がいいだろ？」
「ふふ、ほんとに何が起こったのかと思ったよぉ。いっつもまさきは強引なんだから。」
あたしは口ではそう言ったけど、とても嬉しかった。店員さんたち、そして翔たちに見つからないかというドキドキ感はあるものの、すごく楽しかった。
あたしをこの部屋に連れ込んだ時にあたしの手を握ったまさきの手は、そのままこのラブコメ映画を見ている間、ずっとあたしの手を

握り続けた。
あたしは自分の見たかった映画を見られることの嬉しさよりも、この映画を見せてくれたまさきと、終始ずっとあたしの手を握り締めてくれている暖かいまさきの手が何よりも嬉しかった。

翔たちが見ている映画が上映し終わる前に、あたしとまさきはそーっと元の場所に戻った。
映画はクライマックスを向かえ、翔と東俊哉はあたしたちが戻ってきたことなど、全く気づいていない様子だった。
あたしとまさきはほっと胸をなでおろし、どちらからともなく顔を見合わせて微笑んだ。

映画が終わると、翔と東俊哉はかなり満足した様子で、映画の余韻から興奮が治まらない様子だった。
４人は軽く食事をした後、ちょうど通りかかったゲームセンターに寄り込んだ。
大人げもなく、東俊哉がいつも通ってるとのことで、他の３人も付き合わされた。
あたしはゲームセンターなんて高校生の時に誘われて２，３回行ったことがあるくらいで、ほとんど経験がなかった。翔とのデートでも一度も行ったことのない場所だったので、きっと翔もこういう類の場所はあまり好きではないのは想像できた。
東俊哉はたくさんのゲーム機械が置かれている中で、迷いもなくある一つのものに向かった。
彼が向かった先は戦闘モノのゲームで、ペアでそれぞれの銃を使ってモンスターを倒していくタイプのものだった。
彼は手馴れた手つきで銃を構える姿勢をとった。
「如月さんやったことある？一緒にこれやろうよ。」
彼は迷わずまさきを誘った。
「私こういうの苦手だから遠慮する。みゆやってみたら？案外おも

しろいかもよ。」
まさきは誘いの矛先をあたしに向けた。
「え～あたしは全然ダメだよ、こういうの。」
「みゆやってみ。俺が見ててやるから。」
翔まであたしを乗り気にさせるんじゃ、やらないわけにはいかない。
あたしは東俊哉に教わりながら、一つ一つモンスターをやっつけた。
銃を撃つ度に振動が起きそうなくらいの大きな音が鳴り響き、初めは耳障りとも感じたが、操作に慣れてくると意外にもあたしはこのゲームにはまってしまった。
すっかり東俊哉と意気投合したあたしは、翔とまさきがその間その場を離れていることなど全く気づかなかった。
あたしがゲームに熱中している間、翔がまさきをゲームセンターの外に呼び出していたこと、増してや2人が何を話していたかなんて、あたしは全く知る由がなかった。

「如月さん、映画見ている間みゆと2人でどっか行ってただろ？あんなに長い時間トイレに行ってたとも思えないし。」
翔は表に出るとすぐにまさきへ本題の話をし始めた。
「みゆも私もああいう歴史モノ興味なくて、私が他の映画見にみゆを連れ出してただけです。私、こういうの慣れてるから大丈夫。みゆも喜んでましたよ。」
まさきの何の悪気もない、当然のことをしたような口ぶりに、翔は怒りを抑え切れなくなった。
「人の彼女勝手に連れ回すのやめてくれる？如月さんにはみゆがお世話になってるみたいだけど、みゆには俺がいること忘れてないか？」
「私は友達として仲良くしてもらってるだけなのに、なんか松江さん変な言い方ですね。」
まさきは終始冷静な口調で翔に言い返した。
「君、みゆのことただの友達として思ってないだろ？」

「私は女だし、みゆの友達以上でも何でもありません。でもみゆを好きな気持ちはあなたと同じだよ。ううん、それ以上の自信はある。」
まさきは翔の目を真っ向から見つめ、言い切った。
「みゆは普通の女の子なんだ。俺と結婚して、将来幸せな家庭を築くことしか考えてない。今後一切みゆのこと掻き乱すのやめてくれよ。」
翔はまさきに言い残すと、あたしと東俊哉の元に戻っていった。
遊びに夢中になっていたあたしたちは、やっと遊びきった満足した表情でゲームを降りた。
翔と、少し離れて立っていたまさきは、先ほどと全然変わった様子もなく、あたしは到底翔とまさきの間でどんな会話があったかなんて思いにもよらなかった。

一日遊んでようやく解散したあたしたちは、それぞれ帰路に着いた。
まさきと東俊哉を見送った後、翔はあたしを家まで送ると言って、あたしと肩を並べて歩き出した。
「楽しかった？」
翔は前を見ながらあたしに問いかけた。
「ほんと久しぶりにすごく楽しかった。なんだか変な４人の組み合わせで、最初はどうなることかと思ったけど、案外一緒に遊んだら楽しかったね。」
「あの如月さんとの映画の約束に俺を連れてくことが不安だった？」
楽しい余韻に浸っているあたしに、翔が突然こんな質問をしてくることに、あたしは一瞬答えることができなかった。
「映画館でお前がアイツと途中抜け出してたとこ、俺知ってたよ。他の映画２人で見てたんだろ？」
翔がすべてお見通しだったことに、あたしはびっくりしてしどろもどろになってしまった。

「翔知ってたの！？あっ、まさきが教えたのね。もうまさきったら口が軽いんだから。あたしとまさき、ああいうの見るのつまらなくて、あたしの見たかった映画少しだけ2人で見ちゃったの。まさきはそういうことも平気でやっちゃうんだから。でもおもしろかったぁ。今度あたしたちもやってみる？スリル満点だよ。」
あたしは冗談交じりで翔に笑いかけた。でも翔の表情は柔らかくなることなく、真剣な面持ちのままだった。
「みゆ、アイツとはこれから距離を置いてくれないか？」
「何よ、突然。まさきはあたしの大切な同僚だよ。仕事上でもすごくいいパートナーなんだよ。あっまさか翔、女の子に嫉妬してるの？なんだかおかしいよ、翔。」
「アイツはみゆのことそういう風には見てない。一人の女として見てる。俺は2回しかアイツに会ったことないけど、初めて会った時からそう感じてた。あんなレズと付き合うのはもうやめろよ。」
レズ…？？
翔からはっきりそう言われて、あたしはまさきに同性の友達感情とは違う、特別な感情があることに気づかされた。それは否定できない、事実であることはあたしがよく分かっていた。
でも、まさきのことを”レズ”だなんて呼ぶことに、あたしはそんなこと思ったこともなかっただけでなく、それを口にした翔に憤りの思いが爆発した。
「そんな言い方ひどいよ！まさきのことそんな風に呼ぶのやめて！！」
あたしは一気に感情をコントロールできなくなり、自分も知らないうちに翔を置いて走り出していた。

翔はひどい！まさきのこと何も知らないくせにあんな言い方！
まさきはあたしの一番の理解者。一番の心の拠り所。そしてあたしの元気の源。どんな時もあたしを支えてくれて、笑顔と優しい言葉、そしてなかなか踏み出せないでいるあたしを時に強引に推し出して

くれる。いつもあたしを元気にしてくれる。
そんな彼女の今まであたしにしてくれた数々の思い出を辿ると、翔が発した”レズ”という一言が、あまりにも心無く、冷淡で、まさきを傷つける言葉に思えて、あたしの目に涙が止めどなくあふれた。

奇怪なダブルデート（後書き）

古月ひなこです。
いつも愛読してくださってありがとうございます。

まさきの告白

「あんなレズと付き合うの、もうやめろよ！」
翔から言われたあの一言が、あたしの頭の中を駆け巡った。
まさきをそんな風に思ったことは今まで一度だってなかった。
でも確かに、まさきはあたしにとって普通の同性友達か？と聞かれたら、それは明らかに嘘になる。
まさきは確実に、あたしの心の中で友達以上の大きな存在になっているから。
じゃあまさきはあたしのことどう思ってるの？まさきがあたしのことを大切に想ってくれているのは事実だけど、それは普通の友達としての感情？それとも・・・？？

こんなことを考え出したあたしは、頭の中が混乱した。人を好きになるって一体どういうことなのか、それすらも分からなくなるくらい・・・。

週末の眠れない夜が明け、またいつもの出勤の日々が始まった。
「Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ！みゅ～！」
まさきはいつもとまったく変わらない様子だった。
それとは対照的に、どうしてもいつものようなのん気な様子で振舞えないあたし。
まさきはそんなあたしの様子をやっぱりすぐに察知した。
昼休み、まさきはいつもとは違う少し真面目な口調であたしに尋ねた。
「みゆ、大丈夫？なんかあった？」
「うん、大した事じゃないんだけどね。」
大丈夫、とはすっきり言えないものの、翔が行った一言のせいであたしが悩んでいることは、まさきには絶対に口が裂けても言えない

と思った。
「映画に行った日、彼氏になんか言われた？」
まさきにそこを突かれ、一瞬ギクッとした。何も答えられないあたしにまさきは続けた。
「みゆはほんと分かりやすいんだから。別に私たち女同士でどうにかなるわけじゃあるまいし、みゆの彼けっこう嫉妬深いよな。」
そっか、まさきはやっぱりあたしたちの関係は普通の女友達だと思ってるんだ、それが当たり前だよね。
まさきの一言に対して、あたしは必死にそう思おうとした。
でもその反面そう納得できない自分もいた。
「ねぇ、みゆ。今日仕事あがったらうち来ない？うちの母さんがみゆに会いたがってたし、一人暮らしじゃ家庭料理っぽいのずっと食べてないだろ？」
「え？いいの？」
「いいも何も、みゆだったら毎日でもうちに来ていいよ。私も母さんも大歓迎だよ。」
何だか意外な展開に、あたしはとりあえず混乱している自分の感情が少し吹っ飛んだ。
まさきのお母さんってどんな人なんだろう。まさきが暮らしている家ってどんなところだろう。
今日まさきの新たな面が見られることに、あたしは胸がドキドキ高鳴った。
「よっしゃー！あ、、～みゆがうちに来るんだったらもっと部屋片付けとけばよかった～～」
まさきは大失敗、というような表情をしたが、何だかすごく嬉しそうにも見えた。

「ただいま～～！！」
「おじゃましまーーす。」
まさきの家は高層マンションの高層階にあった。

小奇麗にされた玄関を入ると、奥からまさきのように背が高く、スラッとしたスタイル抜群のおば様が急いで出てきた。
「いらっしゃーい！あなたがみゆちゃん？いつもまさきから聞いてるのよ。さぁ上がって！」
まさきのお母さん、とっても綺麗な顔立ち、そしてその顔に似つかない強い口調、まさきはお母さんに似てるんだとすぐに分かった。
リビングに通されると、その部屋もまたあらゆるものが綺麗に整えられていた。
まさきはバッグとジャケットをドサッと床に放り投げた。
「まさきっ！お客さんが来てるのにまたそうやって！自分のものくらい片付けてきなさい！」
「はいはい。」
まさきとお母さんの日常の様子がにじみ出ていて、ついぷぷっと笑ってしまった。
「ごめんなさいね～。まったくうちの子荒っぽくて。みゆちゃんの話は毎日まさきから聞いてるのよ。こんな子といつも仲良くしてくださって。仕事から帰ってくるともう話題はみゆちゃんのことばっかり。まさきったら、ほんとにみゆちゃんのこと好きみたい。」
「母さん、そんなこといいから早くご飯にしようよ。一日仕事してきてみゆも私も腹ペコペコなんだから。」
「あ、そうだったわね。すぐに準備するわね。」
そう言ってまさきのお母さんはキッチンに小走りに入っていった。
「うちの母さん、いつもああいう感じだから、あの人が言うことあんまり気にしないでね。」
「でもお母さんとまさき、そっくりだよ。」
「え～？そう？いつもああやって私を叱り飛ばすんだよ。私は大抵のことは怖いと思ったことないけど、母さんだけは別。この世で一番怖い存在かも。」
「ふふ、でもすごく仲がいい親子なんだね。」
本心からそう思った。なんの隔たりもなく、こうやってぶつかり合

えること、それも親子の間では必要だと思う。
「あ、そうだ。あれがうちの父さん。」
まさきが指さした方向に目を向けると、リビングの一番端の一角に写真たてや花瓶の花が飾られている場所があった。あたしは立ち上がってその写真の前に行った。
写真に写っているのは体格のよさそうな男らしい顔立ちで、それでいて目元がとても優しい印象の男性だった。それは昨年亡くなられたまさきのお父さんの写真だった。
あたしはしばらく写真を見つめた後、そっと目を閉じて両手を合わせた。
このお父さんが亡くなったことで、まさきはすべてを捨ててアメリカから戻ってきた、そしてそれがあたしとまさきの出会いにつながった。そう考えると、もしかしてまさきのお父さんがあたしたち2人を巡り合わせてくれたのかな、なんだかそんな風にも感じた。

「ごはんにしましょ〜〜！」
ちょうどその時、まさきのお母さんがキッチンから叫んだ。
お母さんとまさきとあたしの3人はテーブルを囲んだ。
食卓にはお母さん手作りの煮込みハンバーグやポテトサラダ、トマトスープなどが勢ぞろい、あたしは思わず目を輝かせた。
「わ〜〜おいしそう！」
ありふれた料理だけど、愛情こもった家庭の味はもう長いこと口にしていなかったあたしにとって、その感動は大きかった。

「こんなにおいしそうなごはん、ほんとに久しぶり。いただきまーす！」
まさきとお母さんが箸をとったのに続いて、あたしもハンバーグを一口パクリと食べた。
お店のものとはあきらかに違い、愛情込められて作られたその味がにじみ出ていて、深く感動するほどおいしいと感じた。

「母さんの料理けっこううまいだろ？」
「ほんとにおいしい！！」
あたしは心からそう思った。
「そんなに喜んでもらえるなんて、作った甲斐があったわ。」
まさきのお母さんもとても喜んでいた。
「あ～みゆちゃんってほんとに可愛らしいこと。うちのまさきと正反対。まさきは女の子らしさのかけらもないんだから。あんた、みゆちゃん大切にしてあげなさいよ！」
「わかってるよ～。なんか私も一応女なんだけどな。母親までそう言うか？」
まさきはブスっとした。
「まさきさんは会社でいつもあたしを助けてくれたり、応援してくれたりして、ほんとにいつも良くしてもらってるんですよ。」
あたしはまさきをフォローした。と言うより、これがあたしの本心だから。
「まぁ～。この子が？ほんとに仲良くしてもらってありがとうね。私もこの子の父親も、まさきにたくましく生きていってほしいと思って、この子が小さい頃から息子のように育ててきたの。私の親も早くに亡くなってね、そのせいで自分がほんとに苦労した経験があるから、まさきにはそんな思いさせたくないと思ったの。誰に頼らなくても一人で立派にやっていける、そんな子に育ってほしかったのね。まさきが15歳の時にアメリカに一人送ったのもその理由で。」
「そうだったんですね。」
まさきの生い立ちに少し触れて、まさきがなぜ他の女の子たちとかなり違う性格の持ち主なのか、なんだか少し理解できた。
「今はすっかりどこに行っても男の子みたいって言われるようになっちゃって。女の子の友達連れてきたのもみゆちゃんが初めてなのよ。いつも付き合う友達は男ばっかり。でもね、荒っぽいところはあるけど、優しいところもあるのよ。」

「それはあたしもよく知ってます。あたしは逆にまさきさん尊敬しますよ。女の子がここまで立派に独立して、自分の生き方ちゃんと持ってて。あたしはいまだに人に頼ってばっかりだから。」
「女の子はそれぐらいがいいのよ。今更だけど私はそう思うのよ。」
「え～？それって育て方失敗したってコト！？」
しばらく黙ってごはんをほおばっていたまさきが横から不満げに口を挟んだ。
「失敗なんて言ってないでしょ。でもあんたもそろそろお相手見つけないと、どうすんのよ！」
「またその話か・・・。」
「みゆさんはその指輪を見る限り、結婚考えてる人がいるのね。」
まさきのお母さんはあたしの薬指にはめられているリングを見てそう言った。
そう、これは昨年クリスマス、翔から婚約の証にもらって、毎日かかさず指にはめているモノ。
「でも結婚にはまだ踏み切れないでいるんです。あたし、まだやりたいことといっぱいあるし。」
あたしはそのリングを見つめながらそう言った。
「そうね。まだ心残りがあるんだったら、全部それをやり遂げてからでもいいんじゃない？焦ってするものでもないしね。」
「そうだよ。女は結婚だけが目的じゃないんだから。」
お母さんに続いて、まさきも言葉を続けた。
「あんたが言う事じゃないでしょ？みゆちゃんとあんたは話が別なの！貰い手も見つかってない子がのん気なこと言ってるんじゃないの。」
「いつも言ってるけど、貰い手がいないんじゃなくて、私が相手なんて必要ないの。今は仕事と結婚したいぐらいなんだから。」
まさきの言葉に、お母さんは仕方がないという様子で黙りこんだ。
「ごちそう様でした！」

おいしい食事を終えた後、まさきはあたしの手を引き、まさきの部屋にあたしを連れて行った。
「全然片付いてないけど、適当に座って。」
まさきはそう言いながら部屋に散乱した雑誌やお菓子の袋などを簡単に片付け始めた。
まさきのいつもの服装と同じく、まさきの部屋もカーテンやベッド、あらゆるインテリアが黒と白のモノトーンで統一され、あたしの部屋の雰囲気とは程遠い、クールな飾りつけだった。
「まさきらしい部屋だね。」
「そう？でもこう見えてけっこう可愛いものとかも好きなんだよなぁ。でも周りが口をそろえて私のガラじゃないっていうから、私のイメージに合ったものしか身の回りに置いてないんだ。」
「そうなの？別に周りがなんと言おうとそんなの関係ないじゃない。まさきって案外周りのこと気にするのね。」
「案外、って、何だか普段周りなんて全然気にしてないみたいな言い方だな。」
ふふ。まさきの意外な顔が見えた。いつも自分の思うように、周りを気にせず生きていると思っていたまさきが、こんな風に意外と周りに気を使っている面を持っているんだなって。
「そのへんのもの適当に見ていいよ。」
まさきの部屋を物珍しそうに見回していたあたしの様子を見てか、まさきは本棚に飾られたものや雑誌類を指差した。
すると雑誌や本が入れられている中に、一つだけそれらとは違う厚いモノが目に付いた。まさきに言われたとおり、あたしは遠慮もなくそれを取り出すと、それはアルバムだった。
「ねぇ、これ見ていい？」
「いいよ。」
開いてみるとそこにはたくさんの写真が隙間もなく挟まれていた。
「わ～～、これまさきの小さい時の？」
「そうそう、この時からやんちゃで、いろんなとこ一人でトコトコ

行っちゃうから、母さん私見るのにかなり疲れ果ててたみたいだよ。」
「あはは！ほんと、この時からやんちゃ坊主って感じだね。可愛い～！」
「なんか今もやんちゃ坊主みたいな言い方だな。これはアメリカで生活してた時の。」
「へ～。なんだか楽しそう。」
それらの写真に写るまさきは、アメリカ人の友達と一緒に写っているものばかりで、今のショートの髪からは想像できないほど長い髪だったり、耳にはいくつものピアスをつけていたり、明らかに今よりもっとはじけたまさきの様子が伺えた。
アメリカでの様子を写し出した写真をすべてめくり終えると、まさきを挟んでまさきの両親が一緒に写っている写真があった。
「これは父さんと母さんがアメリカに来てくれた時の写真。」
3人の顔がこの上なく幸せな表情で輝いていた。
「これが父さんとの最後の時間。」
この写真に写る時間にはもう二度と戻れない、そんなことを思うと、あまりにも切なくて言葉が出なかった。
「みゆまでそんな顔するなよ～。」
まさきはあたしのほっぺたをぷにっとつまんだ。
「私さぁ、ずっと思ってたんだけど、父さんは天国から私とみゆを引き合わせてくれたんじゃないかって。なんかおかしいけど、そんな気がして仕方ないんだ。」
「おかしくないよ。あたしもそう思う。さっきまさきのお父さんの写真の前で手を合わせてた時、あたしもそう感じた。」
まさきもそう思ってたんだ。そう思うと、なんだか胸の奥がキューっと熱くなった。
「みゆ。言おうかどうか迷ってたけど、やっぱみゆには隠し事したくない。私のこと変だと思わないで。」
「うん。何？」

突然まさきの表情がいつもと明らかに違う様子に、あたしは少し困惑した。
「私はみゆのこと、すごく・・・好きだよ。」
「あ、あたしもまさきのこと好きよ。」
ほんとはまさきのほんとの気持ちに感づいてるくせに、あたしはどうしていいかわからず、当然のような笑顔で言葉を返した。
「私がみゆを好きなのは友達としてじゃない。みゆを守ってあげたい。女同士とかそんなの関係ない。私はみゆが好きで仕方ないんだ。」
まさきのあまりのストレートな告白に、あたしの肩が見えないくらいに小さくガタガタ震えるのを感じた。
あたしがまさきに対して友達以上の感情を持っていること、明らかに自分で気づいているけど、まさきもあたしと同じ気持ちでいるコトを知った以上、あたしは気持ちを口に出すことも、認めることもできないと思った。そんなことしたら、今度こそ後戻りなんてできない。あたしにはそこまでの勇気がなかった。
あたしの困惑した様子を見ながら、まさきは言った。
「ごめん、みゆを困らせるつもりじゃなかったんだけど、どうしてもみゆに自分の気持ち伝えたくて。」
「あたしこそごめん。困ってるわけじゃないんだけど、あまりにも突然で・・・。」
あたしが言い終わるか終わらないかと言う時、まさきは突然あたしを引き寄せ抱きしめた。
あたしは何が起こったかしばらく理解ができなかった。
「Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ・・・」
あたしの耳元でまさきが囁いた。
まさきのその言葉があたしの心を貫き、気絶しそうなくらい大きな衝撃を受けた。
まさきはあたしを抱きしめた手をそっと離した。
「みゆにこれあげる。」

そう言ってまさきは引き出しの中から2つのストラップを取り出した。
スワロフスキーの大きめのネコがついた色違いのストラップ。その片方をまさきはあたしの手に握らせた。
「こういうストラップつけるのガラじゃないけど、ネコキャラけっこう好きなんだぁ。みゆとおそろい。これつけて、毎日もっとみゆを近くに感じていたい。」

あたしを家まで送りたいと言ったまさきに「大丈夫だから」と振り切って、あたしはすっかり日が落ちた夜道を一人ゆっくり歩き出した。
あたしの手にはまさきがくれたネコのストラップが握られたまま。
まさきのぬくもりがまだあたしの体中に残り、頭の中までまさきに囁かれた言葉で埋め尽くされ、まるで気の抜けた抜け殻のように、あたしは夜道を歩き続けた。
初夏の暖かい風が、そんなあたしの体を優しく吹き抜けていった。

まさきの告白（後書き）

古月ひなこです。
いつも愛読していただきありがとうございます。

愛してる・・・

すべてが同じ毎日。
毎朝、人混みに押しつぶされそうになる満員通勤電車から人波に流されるように外に押し出されると、再び差し込んでくる強い日差し、それがまたあたしをさわやかな気分にさせる。
会社につくといつもの同じ顔ぶれ、デスクに向かってこなす同じような作業、こうやって一日が流れていく。
その中で一つだけ以前と違うこと。
それはあたしの携帯に新しいネコのストラップがつけられたこと。
あの人とおそろいのストラップ。
これを見るたび、あたしはあの告白を思い出す。
そしてこのネコがあたしの所につけられたのと同時に、あたしの心は急速に、もう一つのネコを持つあの人へ惹かれ吸い込まれていく。

まさき・・・あなたへの止められない想い。
もしもすべてを捨てて、何も考えずにあなたの元に飛び込めたなら、あたしはどれだけ幸せだろう。
でもあたしにはその勇気がない。無条件にあなたを愛してるなんて言えない。
だってあたしには約束された将来がある。
そして、それよりも何よりも一番高く厚い壁は、あなたが女の子だという事・・・。

「ＭｙＤｅａｒ　みゆ！」
あたしとの間にあんなことがあっても、まさきはあたしに相も変わらず人懐っこく会いに来る。
やっぱりあたしもまさきの顔を見ると意味知れぬ安心感に包まれる。
「まさき、おはよう。」

なんでもない挨拶をかわす2人の間に、語りきれない想いがお互いの目と目を通して通い合う。
このまま時が永遠に止まってしまえばいいのにと思ってしまうくらい心地よい瞬間。
あたしはいつしか、仕事をしている時無意識にまさきが来てくれる事を期待するようになっていた。
そして目で確認する前に、まさきがここに向かってくる足音と気配にすぐに感づくくらい、まさきのことで頭がいっぱいだった。
もちろんまさきとのランチの時間が、一日のうちであたしの一番の楽しみの時間。もうまさきをあたしの生活から抜かすことなど考えられなくなっていた。

今日もそんな幸せなランチの時間が近づくと、突然あたしの携帯の着信が鳴った。
電話はフィアンセの翔からだった。
翔の名前が携帯の画面に表示されたのを見て、あたしは一気にこの間の映画の事件のことを思い出した。
あの日、最後に翔とけんか別れとなって、それっきり長い時間が経っていた。そして少し忘れかけていた、けんかの発端となった翔のまさきを侮辱する一言が再びあたしの脳裏に蘇った。
翔からの着信に応答するか否か戸惑うあたし。
でも翔からの着信は途切れることなく鳴り続け、あたしはやむなく通話ボタンを押した。
「もしもし・・・」
「みゆ？元気だったか？俺今みゆの会社の前にいるんだ。出てこれる？」
「急に来られても困るよ。突然どうしたの？」
「みゆの顔見に来るのに理由なんて必要ないだろ？今からメシ食べにいこ。俺腹へってるんだから早く降りて来いよな！」
翔の声はまったく何事も起きていないかのように、いつもとまるで

同じトーンだった。
ちょうどその時あたしを迎えに来たまさきに、あたしは顔の前で両手を合わせ「ごめん」のポーズをした。
「まさき、ごめんね。今翔がそこに来てるんだ。」
「よかったじゃん。彼氏と会うの久しぶりだろ？2人でごゆっくり～。」
まさきはほんとに嬉しそうにそう言って、あたしを押し出した。

こういうまさきの態度にあたしは少し戸惑いを感じる。あたしはまさきにとって一体何なのか。
まさきははっきりとあたしに言ってくれた。
「友達としてではなくて、あたしのこと好きだよ」って。
でもその傍ら、いつもあたしと翔の関係を応援してくれる。
それはやっぱり、あたしと翔の関係なんてまさきにとってどうでもいいことだから？
それともそれがまさきの優しさなの？？
消化しきれない思いを抱えたまま、あたしはまさきに背中を押されるがまま、翔の元に向かった。

翔との食事の間、翔は一言もこの間のけんかの内容も、まさきのことについても口には出さなかった。
どことなく元気のないあたしの様子を知ってか知らずか、翔はずっと自分の会社での出来事やくだらない世間話で話を途切らすことはなかった。
あたしはそんな翔の態度に耐え切れず、重い口をやっと開いた。
「翔、あたしね。前みたいに翔のことだけを想って、翔との結婚だけに憧れてた、そういうあたしじゃないの。翔はちょっと感づいてるかもしれないけど…」
「いいよ、みゆ。みゆが今どういう状態であれ、俺はみゆと一緒になることしか考えてないし、絶対俺たちには幸せな未来があるって

信じてる。でも考えてみたら仕事仕事って言ってみゆを放っておいた俺が悪かったんだからさ。俺決めたんだ。これからはみゆを寂しい想いにさせないように努力する。できるだけ毎日みゆに会いに来るようにするよ。いいだろ？」
あたしはその翔の問いかけに答えることも、うなづくこともできなかった。
以前のあたしだったら翔のこの言葉がどれだけ嬉しかっただろう。いつでも会える距離なのになかなか会えない現実。どれだけ翔に会いたくて寂しい夜を過ごしたか。
でも翔。今さらあたしにこんなこと言っても遅いよ。
今のあたしは確実に以前のあたしと違っているんだから。
あたしの心の中に今いるのは、翔一人じゃないの。翔よりももっと大きな存在・・・まさきがいる。
この気持ちはどうやっても止めることができない。

それ以来、翔は自分が言ったとおり、毎日お昼の時間にあたしの会社まで足を運ぶようになった。
あたしは翔のフィアンセ。それを断る理由も遠慮する理由もまったく見当たらなかった。
そして翔との時間が増えた分、まさきとの時間が減っていった。
毎日翔の顔を見て、翔と何でもない会話をかわす。このありふれた幸せを、あたしはずーっと望んで夢見てたはずなのに。
今はまさきとの2人の時間が減っていくことにやるせなくて仕方がない。
翔への想い、そしてまさきへの想い、2つの想いの狭間で、今のあたしは時の流れに身を任せることしか方法がなかった。

季節は暑さにうだる8月となった。
相変わらず毎日のように昼の時間になると訪れる翔の姿が、あたしの会社の同僚の間でも話題になった。

「白井さんの彼氏、毎日会いに来てくれるなんて、ほんっとに彼女想いなんですね～。」
「あんな彼氏私もほしい！」
「結婚はいつなんですか？」
いろんなことを周りから言われるようになった。
でもあたしの一番気になるのは、まさきの反応だった。
まさきはランチの時間あたしと一緒にいれなくなった分、仕事中なにかとあたしのところに来るようになった。
それでも、翔が毎日あたしに会いに来ることについて話題に出すこともなく、かと言ってそれに対して不満に感じている様子も見えなかった。
そんなまさきの無反応な態度に、あたしはまさきが何を考えているのか分からなくなることもあったが、それでも、お互いの携帯につけられたネコのストラップが揺れるたび、あたしたちの想いは冷めていないんだということを証明していた。

その頃会社では、もうすぐお盆休みということで、一斉に会社中の整理をすることになった。
あたしは大量の書類が保管されている書庫の整理を担当することになった。
長年ほとんどしっかりと整理されていなかった書庫の中は、一見きちんと整えられているものの、なんのタグもつけられず、類分けもされていない乱雑な状態で、これを全てあたし一人で整理すると思うと、無意識に深いため息が出た。
この量を一人でやるのは少なくとも数日かかるが、まったくの一から整理をするチャンスもそうそうないので、やっぱりこの機会にやってしまおうと再び気合を入れた。
整理を始めて一時間ぐらいすると、書庫の中は棚の中から一旦取り出した書類で、足の踏み場もないどころか、入り口も見えなくなる

ほどで、あたしは書類の中に完全に埋まっていた。
すると誰かが書類を書き分けて入ってくるのが見えた。
「おいおい、これ一人でやってるのかよ～。」
信じられないといった顔で、書類に埋もれているあたしの姿に苦笑いして立っていたのはまさきだった。
「みゆのＨｅｌｐでもしようと思ってきたけど、ここまでひどいとはなぁ。」
「まさき、ブツブツ言ってないでこれお願い！」
強い口調でそう返したあたしだけど、心の中ではまさきがまるで救世主のように映った。
あたしが困っているとき、必ずあたしを助けてくれる。まさきはいつもそうだった。
そして今日もこうしてあたしの元に来てくれた。
翔が毎日あたしに会いに来るようになってから、まさきとの時間が確実に減っていた。
そのせいかな。こうして久しぶりにまさきと2人きりになることが、なんだか照れくさくてドキドキする。
「ほらほら、みゆ～。ぼーっとしてないでどんどんやるぞー！これ今日中に終わらせようよ！」
まさきとの2人の空間に浸っていたあたしは、まさきにカツを入れられ我に返った。
この膨大な量の書類を一日で片付けるのはムリじゃないかと、まさきの言葉に半信半疑だったが、とにかくこんな仕事を何日もひきずりたくないのと、そしてまさきのやる気に満ちたその言葉のおかげで力をもらったあたしは無我夢中に書類を整理した。

まさきもあたしも大量の書類を前に、ただ無言で手を動かしながら時間はみるみるうちに流れていった。
あたしが類分けした書類をまさきが整え書庫に入れていく、この作業が切りなく続いた。

あたしたちの知らない間に、外はもう日が暮れ始め、辺りはすっかり薄暗くなっていた。
無心で作業を行っていたあたしたちだったが、ふとあたしが書類を渡す手がまさきの手に触れた。
その瞬間、あたしは何だか変に恥ずかしくなって手が止まってしまった。
そんなあたしの様子に影響されてか、まさきもあたしに触れた手を一瞬離した。
でもまたすぐにまさきはあたしの手を掴んだ。
突然の事にあたしはびっくりし、書類があたしの手からバサッと音を立て床に落ちた。
まさきはその落ちた書類などに目をくれることもなく、まっすぐにあたしの目を見つめていた。
書庫の中の暑さで、あたしのキャミソールから露出した首や肩に汗が流れた。
まさきはあたしの手を掴みながら、もう片方の手で、あたしの顔、首そして肩まで、そっとあたしの汗をぬぐった。
「最近ずっとみゆと一緒にいれなくてすっごく寂しかったんだよ。」
まさきの目は本当に悲しそうな表情だった。
「あたしも・・・。ごめんね、ずっと一緒に食事にもいけなくて。」
ストレートに見つめるまさきの目に、あたしも自分の心を隠すことができなかった。
「みゆ、愛してる・・・」
あたしの汗ばんだ額や髪の毛をそっとなでながら、まさきはあたしに囁いた。
その言葉にあたしはもうどうなってもいいと思った。
「まさき、あたしも愛してる・・・。」
まさきはあたしのその言葉を聞いて、なぜか今にも泣き出してしまいそうな表情であたしを抱きしめた。
この時あたしはもう翔の存在も、まさきが女の子だという事実も、

もうどうでもよかった。
そしてあたしの両手はまさきの背中に回り、しっかりとまさきを抱きしめた。

まさきのおかげで、作業はこの日の夜８時を少し回った時点ですべて片付いた。
きれいに整理された書庫のように、あたしの心の中もきれいにまさき一色に染まっていた。
すっかり日が落ちきった帰り道、あたしとまさきは手をつないで肩を寄せ合い歩いた。
何も言わなくても、相手への愛おしさがつないだお互いの手から流れてくるようだった。
あたしはまさきを愛してる・・・。
こんな簡単なこと今になって初めて気づいた。というより、認めてしまった。
あたしの気持ちはもう後戻りできない。どんなことを犠牲にしたとしても・・・。

お盆休みが明け、また通常の勤務が始まった。
まさきとのあの日の出来事、それは鮮明にあたしの心の中に刻まれていた。
「みゆ、おはよ。」
いつも元気に満ち溢れ、少年のようにあたしをからかってくるようなイタズラな表情は、この日明らかに違っていた。
まさきもあの日のことを気にかけているのか、なんだか少し恥ずかしそうに小さくあたしに挨拶をする姿がなんだか可愛いかった。
なんでもない挨拶の一言だけど、お互いの目と目を通じて、また愛おしさがにじみ出てるようだった。

昼休みになると、相変わらず翔があたしを迎えに来ていた。

あたしが食事に行こうと準備していると、まさきがあたしの所にやって来た。
「今日も彼氏と？」
まさきはいつもあたしが翔と会うことにまったく無関心なのに、この日はなんだか不満げにそう聞いてきた。
「うん。ごめんね。ちょっと行って来るね。」
そう言ってあたしが自分のバッグを取ろうとすると、まさきは突然あたしの手を掴んだ。
あたしの手を掴みながら無言でいるまさきに、あたしはどう反応していいのか分からなかった。
「どうしたの？」
なかなか口を開かないまさきだったが、ようやく一言つぶやいた。
「もう、アイツのとこ行かないでよ．．．」
まさきの重い一言にあたしは何も言い返すことができなかった。
そんなあたしの反応に、まさきはすぐに表情を変えた。
「なーんってね！ごめん、みゆがどんな反応するかなぁと思って。」
「ひっどーい！まさき」
「みゆはほんとからかうとおもしろいな。そうだ、私も一緒にランチ行っていい？」
顔が真っ赤になっているあたしだったが、またもやまさきの唐突な提案に戸惑った。
「じゃあ行こう！」
一方的にあたしの手を引っ張って、会社の外で待っている翔の元に向かった。
散々あたしの心を振り回す冗談を言っていたまさきだったが、あたしの手を引く彼女の手がいつにもなく強い力であたしの手を握り締め、何だか「アイツのとこ行かないでよ」と言ったまさきの一言が、まんざら冗談でもないように感じた。
あたしの手を引いて駆けてきたまさきの姿を見るなり、翔の顔は明

らかに引きつっていた。
「すみません、今日は私も一緒にいいですか？」
まさきは何の悪びれた様子もなく翔にたずねた。
「ああ。いいですけど。」
翔も顔には不満の表情が表れていても、何でもないように繕っていた。
食事中、翔はまるでまさきがそこに一緒にいるのを忘れてるかのように、まったくまさきに気を使うことなく、あたしと自分についての話題を話し続けた。
まさきもその間は無言でスパゲティを食べているだけだった。
翔はしばらく何でもない世間話をしていたが、突然思い出したように切り出した。
「そうだ！もう夏も終わりなのに今年は海にも行ってなかったよな。今度の週末海行かない？」
「海？そう言えば今年行ってなかったね。行こうよ。」
翔の思いもかけない提案に、あたしは無条件に喜んで答えてしまったが、すぐに次の瞬間、隣に座っているまさきのことが気になって口をつぐんだ。
「如月さんも行く？」
この言葉を言ったのは翔だった。あたしの心を知ってか知らずか、翔がまさきを誘ったことにあたしは驚きを隠せなかった。
「私もいいんですか？」
「海行くなら2人で行くより人数が多いほうが楽しいし、そっちで何人か誘ってよ。俺も会社の奴らに声かけてみるから。」
翔がまさきを誘うなんて・・・。あたしとまさきの関係をもう疑わなくなったのかな？
彼が何を考えてるのかまったく見当がつかなかった。
あたしと海に行けることで、あたしの隣で無邪気に喜んでいるまさきとは対照的に、あたしはまた翔とまさきの間に挟まれ、ひと波何かが来そうなそんな予感にあたしは苛(さいな)まされた。

愛してる・・・（後書き）

古月ひなこです。
いつも愛読いただきありがとうございます。

最後の夏

8月も終わりに差し掛かった週末。
空に広がるまだらな薄い雲と照りつける強い日差し、蝉の声、そして容赦ない暑さは、まだまだ夏が終わっていないことを物語っている。
浜辺には夏休み最後の週末ということもあり、無数のパラソルと人で埋め尽くされていた。

「海だーー！！」
「早くはいろーーー！」
浜辺についたあたしたちは広々と広がる海を目の前に興奮した。

翔の誘いで海に来たあたしとまさき。それに親友の永田あさみとあさみの下で働く25歳の2人の男女。
そして翔は、あたしとまさきが顔見知りである東俊哉（あずまとしや）と、その同僚の男性を一人連れてやって来た。
ここに集まった男女8人はみんな今年海に行っていない人たちばかり。すべてのストレスから解放され、最後の夏を満喫するには最高の場所だった。

あさみとあさみの部下2人は、海に着くと真っ先に水着姿になり、海の方にはしゃいで駆けていった。
「みゆも早くおいで〜〜！」
早くも向こうの方で水に足をつけていたあさみが大きな声であたしを呼んだ。
「みゆ、私たちも早く行こうよ！」
まさきもあたしをせかした。
「そこのお2人さんも先に海に入ってなよ。」

翔と一緒にパラソルなどを準備していた翔の同僚に声をかけられ、あたしは翔たちを待つのをやめてTシャツを脱いだ。今年買った鮮やかなストライプ模様のビキニを着るのは今日が初めて。なんだかちょっと気恥ずかしい。
それは翔の前で初披露するっていうのもあるけど、何よりもまさきが隣にいるせい、だからかな・・・。
「みゆ、めちゃめちゃ可愛い～！」
服を脱ぐなりまさきはすぐにあたしを見てそう言った。
そういうまさきの方を見てみると、彼女のビキニはいつものまさきらしいモノクロトーンの配色だが、よく見ると小さなハートがたくさん散りばめられ、それが何とも可愛いらしく、スマートで、彼女はとても美しかった。
「女の子のビキニ姿キラキラしてんなぁ。。」
東俊哉が目を輝かせていった。
「男はすぐそういう目で見るんだよな。」
まさきは前回の映画で顔見知りとなった東俊哉に遠慮ない口調で言い返した。
「みゆ、いこ！」
まさきはあたしの手をぐいっと掴むと一気に海の方向に走った。
なんだかこんな解放された気分でまさきと一緒にはしゃげることに、あたしはとても興奮してしまった。
まさきと手をつないで浜辺を走っていると、ふいにまたまさきの告白のことを思い出してしまい、自分の顔が赤くなっていないかとても気になった。

あさみたちと合流して、あたしたちは水を掛け合ったりビーチボールを投げ合ったり、沖のほうまで泳いでみたり、それぞれ和気藹々子供のように遊んだ。
ふと陸のほうを見ると、翔とその同僚2人は横になってまったりと過ごしている様子だった。

あさみとまさきはあたしに比べて泳ぎが上手で、スイスイ自由自在に沖まで行ったり来たり。
まさきが入社したばかりの頃、あさみはまさきの突拍子もない性格を相当毛嫌いしている様子だったが、まさきの裏表ない明るい面と、あたしとまさきがいつも仲良くしている影響もあってか、あさみはいつしかまさきを同じ仲間として認めてくれるようになっていた。
そして今日も泳ぎが得意だという共通点から、2人はとても溶け込んでいる感じに見え、あたしはとても嬉しくなった。
だってあたしにとってあさみとまさきは、どちらも欠くことのできない一番の大事な親友であり、あたしの理解者だから。

「浮き輪でも持ってくればよかったなぁ。」
あまりにも気持ちよさそうに泳いでいるあさみとまさきの姿を見ながら、全然泳げないあたしは自分をもどかしく思った。
「みゆ、私がいるから大丈夫。」
あたしのどうでもいい独り言に、まさきは聞き逃すことなくそう答えた。
「こうやって、ちゃんと捕まってて。」
まさきはそう言うと、あたしの両手を掴んでまさきの首の後ろに回させ、まさきの足がぎりぎり下に届くところまでゆっくり後ろ向きに歩き始めた。
「ちょっと怖いよ。大丈夫かな。」
あたしは無意識にまさきの首に回した両手に力が入り、まさきにしがみついた。
「みゆ力抜いて。足は浮かせて大丈夫だよ。私が支えてるから。」
まさきはしっかりあたしを支えてくれていた。
まさきとの顔の距離がかなり近くて、あたしはまたまさきとのキスのことや、お互いに愛し合っていることを認めてしまったあの日の事を思い出した。
どうしようもなく恥ずかしい気持ちになってあたしの頬がみるみる

染まっていくのを、まさきも見逃していなかった。
「このままみゆとずっとこうしていたいな・・・。」
まさきの一言にあたしは黙っていたけど、あたしの心の中はまさきと全くおんなじ気持ちだった。
あたしは体を完全にまさきに委ね、まさきの肩に頭をもたれた。
ゆらゆら揺れる波とまさきのぬくもり。このまま無人島まで流されていってもいいなぁなんて、そんな妄想にまで囚われた。
ドッブーン！！
その時突然まさきがバランスを崩し、一瞬にして2人同時に水の中に沈んだ。
すぐに水面から顔を出したあたしたちはお互い顔も髪の毛もずぶ濡れ状態。
「みゆ大丈夫だった？」
まさきは心配した表情であたしを覗き込んだ。
「まさき！ちゃんと支えてくれてるんじゃなかったのぉ？？」
お互いの間抜けな顔に、思わずあたしたちは大笑いしてしまった。
「水も滴(したた)る美女になったね、へへ。」
「もう！まさきってば！」
怒ったふりして頬をふくらませたあたしだけど、ほんとはすごくおかしくて楽しい気分だった。そしてこんな時間がとっても幸せだった。
まさきはその手であたしのびしょびしょになった髪の毛を整えてくれた。

「みゆ～！そろそろ一旦上がろうよ。翔さんたち呼んでるよ。」
キリなく遊んでいたあたしとまさきだったが、あさみの声にあたしたちは海から上がることにした。
翔たちのところに戻っていくと、男3人はバーベキューの準備をすっかり終えて待っていた。
「さすがだねー。翔さんたち素敵！」

あさみは段取りのいい男たちに惚れ惚れしている様子だった。
でもあたしは何となく翔の顔を見ると現実に引き戻された感じがして、さっきまでのまさきとの2人の時間がなんだか夢の中のことのようにモヤモヤと薄れた。
そして何よりも、あたしとまさきが仲良く遊んでいる姿を見ていたであろう翔が、あたしの相手もせず、これと言って反応もないまま、他の同僚たちとたわいもない話で盛り上がっていることに、なんだか違和感を覚えた。

お肉や野菜、海鮮が乗った鉄板を囲んで、みんなビール片手に箸をつついた。
あたしは普段お酒を飲まない性質(たち)だけど、この時ばかりはこの楽しい雰囲気と焼けるように暑い日差しに、ビールがやけにおいしく感じた。
すると翔があたしの隣にやってきた。
「みゆ、楽しそうだな。酒に弱いんだからあんまり飲みすぎるなよ。それよりこういうのもいっぱい食えよな。」
そう言っていい色に焼けたお肉や海老をあたしのお皿にポンッと乗せた。
いつも優しい翔だけど、あたしがまさきと一緒に気兼ねなく遊んでいることに、今日は何も言うことなくこうして接してくれる翔に、更に彼の優しさを感じた。
「みゆ、肩が赤くなってる。ちょっとこっち来てみ。」
ふとあたしの肩が焼けているのに気づいた翔は、あたしをパラソルの下に引っ張っていった。
「炎天下でこれだけ焼けたら、今日痛くて風呂にも入れねーぞ。みゆのせっかくの白い肌も台無しだし。」
翔はそう言うとあたしのバッグから日焼け止めローションを取り出し、あたしの肩や背中に満遍なく塗っていった。
優しくあたしの背中を撫でる翔の手に、あたしは完全に身を任せた。

ふと顔を上げてバーベキューをしているみんなのほうを見ると、みんなはあたしと翔のことなどお構いなく、ワイワイ楽しそうに盛り上がっていた。
でもその中でまさきだけが、じっとあたしたちの様子を見つめていた。その目がとても悲しみのこもった表情に見えてならなかった。
「翔、ありがと。もういいよ。あっち戻ろう。」
あたしはまさきに見られていることに居たたまれなくなって、翔の手を止めた。
でも翔の手は止まることなくあたしの髪の毛を分けながらうなじを塗ったり、ビキニをずらして細かくローションを塗り続けた。
「みゆ、この水着すごい似合ってんな。やっぱ俺の中ではみゆが一番きれいだよ。みゆを取ろうするヤツがいたとしても、誰にもみゆを渡さない。」
「どうしたの？そんなこと言っちゃって。翔なんか変だよ。」
こんなカッコいいセリフほとんど言ったことない人なのに、真剣な目であたしに語る翔の顔がなんだかおかしかった。
笑いがこもったあたしの言葉にも、翔は表情をまったく変えることなくあたしを見つめ、次に軽くあたしの肩に、そして口にキスした。
あたしたちのこの一瞬のやり取りに、誰も目を向けて見ている人はいなかった。まさき以外は・・・。

みんなの元に戻ると、みんなはスイカを割って食べ始めていた。
「みゆ何やってたんだよ。スイカ食べる？」
まさきはあたしの分のスイカを持ってきながら明るく振舞っていたが、彼女にあたしと翔の会話は聞き取れていなかったものの、あたしたちのやり取りを目の前に、隠し切れないまさきの動揺が手に取るようにわかった。
それは彼女のビールを飲むペースがだんだん速くなっていく様子からも読み取れた。
みんなはだいたい食べ終わると、また海に戻ったり、パラソルの下

で横たわったりしながら、それぞれの時間を満喫した。
翔も食べ終わるとようやく海に足を向け、一人沖の方まで泳いでいった。
その間、まさきはずっとビール片手に一人砂浜に座り込んでいた。
あたしはまさきの横に腰を下ろして、まさきと同じようにビールを飲んだ。
しばらく黙って海を見つめていたまさきが、やっと口を開いた。
「こんなにみゆが好きなのに、みゆはやっぱりアイツのカノジョなんだよな。」
そう一言言うとまさきはまた黙り込んでしまった。

あたしはこの沈黙の中でふと思うことがあった。
まさきはいつもあたしを好きだと言ってくれるし、そういう表現と態度であたしに接してくれる。
でも、あたしがまさきのことをどう思っているか、翔との関係をどうしたいのか、それらについて彼女は今まで一度だって触れたことがなかった。
あたしはそんなまさきの態度にもどかしさを感じていた。
もしもまさきが本当にあたしと一緒になりたいと思って、翔との関係も終えてほしいと願うならば、あたしは一体どちらを選択するだろう。
正直言って、翔とのことも何もかも全て捨ててまさきと一緒になりたいと、自信満々に言う勇気はない。
でももしまさきが全ての困難を覚悟であたしと一緒になりたいと本気で言ってくれるなら、あたしはその選択肢も捨てることはできない。むしろ今のあたしは、それくらいの決心をしてもいいと思ってしまうほど、まさきが愛おしいと感じているのは事実だった。
でもそんなあたしの心中を知ってか知らずか、そこまで突き詰める様子は彼女になかった。

沈黙を通し続けている隣のまさきに目を向けると、その横顔にいつもの明るい彼女の表情は一切見当たらなかった。
そしてどことなく悲しそうな目で見つめている先は、あたしの手、薬指に光るリングだった。
そんな彼女に、あたしは意を決して口を開いた。
「あたし、まさきのことすごく好きだよ。まさきがあたしのこと大切に想ってくれてるのとおんなじ気持ち。」
まさきはあたしのこの言葉を聞いてあたしを見つめた。あたしは続けた。
「まさきはどうしたい？あたしに翔と別れてほしい？」
ゆっくりと穏やかにまさきに尋ねてみたが、あたしの心の中はドキドキで押しつぶされそうだった。
少し間が空き、ようやくまさきが話し出した。
「カレと別れてほしいなんて私は言える立場じゃない。でも・・・でもみゆがアイツと一緒にいるとこ見ると心が潰れそうだよ。」
それが今のまさきの精一杯の本音だと感じた。
あたしはそれ以上何も聞かなかった。と言うより聞けなかった。
彼女もあたしを愛したことでこんなにも苦しい想いをしていることが分かって、あたしの方こそまさきをここまで苦しめる立場ではないと思った。

しばらく黙ってゆっくりとビールを飲んでいたあたしたちだったが、最後の沈黙を破ったのはやっぱりまさきだった。
「さーてと。なんからしくもなく暗くなちゃったなぁ。みゆを愛してる気持ちはアイツに負けないくらいなのは事実なんだから、こんなに悩むことなんてないよな！なんか海見てたら叫びたくなってきた。みゆ愛してるよーって叫んでいい？」
そう言って今にも叫び始めようとする仕草を見せるまさきに、あたしは慌てて彼女の口をふさいだ。
「お願いだからそれはやめて！」

まさきはあたしをからかいながら大笑いした。
そんな彼女のいつもの明るく少し意地悪な様子に、あたしはホッとした。
彼女の様子を見てあたしも、とにかくまさきを好きでいる気持ちに嘘をつく必要はないと思った。
こんな状態がいつまで許されるか分からないけれど、とりあえず今すぐに結論を出す必要もないと思えた。
「よしっ！またひと泳ぎしてこよー！」
そう言ってまさきは残りのビールを飲み干した。
さすが、お酒には詳しいだけではなくてかなり強いと豪語していた彼女だったが、あたしが見る限りでもかなりの量を飲んでいたのに、彼女は顔色一つ変わっていなかった。
あたしも彼女に続いて最後の残りを飲み干すと、まさきはあたしの手を引っ張って海に向かった。
火照った体が冷たい海の水に浸かり、とても心地よかった。
あたしより先に沖の方へずんずん進んでいくまさきの後姿を追いながら、水の中を進む足取りがフワフワと宙を浮くような感覚に似ていて、何となくこのままスイスイ泳げてしまいそうなそんな感覚を覚えた。
「みゆー！大丈夫ー？」
まさきが少し離れた所からあたしに叫んだ。
「全然大丈夫！あたしまさきのとこまで泳いで行ってみるね。」
それを聞いて笑ってるまさきの顔が見えた。
あたしはまさきが泳いでいたのと同じ形で泳いでみた。
すると、今まで気分がとても良かったのに、突然足が思うように動かなくなり、空を見上げたあたしの目にあまりにも強い光が差し込んで、眩しさのあまりそのまま目の前が真っ白になった。
あちらの方からまさきがあたしの方に向かってくる姿が微かに見えたのを最後に、あたしは突然呼吸ができなくなり、水の中に沈んでしまったようだった。

誰かの手が水の中であたしを支え起こそうとして掴んでいるのが分かり、その手がまさきの手だということも分かったが、自分の体をどうすることもできず、あたしの意識はみるみるうちに遠ざかっていった。

もうダメだ・・・。

そう思ったその瞬間、あたしの体が一気に水から引き上げられた。

朦朧(もうろう)とする意識の中で、微かに目に映る風景はどんどん陸の方に向かっていってるようだった。そのまま目を瞑(つむ)ったあたしだったが、あたしを抱きかかえてる人が必死に声をかけてくれることで、あたしは意識が遠ざかっていくのを持ちこたえた。

「みゆ！みゆ！！目開けろ！」

その声は聞き慣れている翔の声だった。

翔に抱きかかえられ、あたしは救護室に運ばれた。

ベッドに横にされたあたしはそっと目を開けてみると、ベッドの横には翔とまさき、そしてあさみたちみんなが心配そうにあたしを囲んで覗き込んでいた。

「ごめんね・・・せっかく楽しく遊んでたのに。」

こんなことになってしまって、あたしは心の底からみんなに申し訳ないと思った。

「酒飲めないくせにあんなに飲んで、その上すぐに水に入ったら当然だろ！心臓が止まる思いだったぞ。」

翔はかなり怒った口調でそう言ったが、彼の表情や顔色から本当にあたしのことを心配してくれている様子が見て分かった。

ベッドを挟んで翔の反対側に立っていたまさきに目を向けると、彼女の目にはもう今にも涙が落ちそうなくらい、悲痛な表情を浮かべあたしを見つめていた。

「もう大丈夫だから、しばらくゆっくり休め。」

翔のその言葉に、押さえ切れない眠気に襲われていたあたしは、そのまま目を閉じて眠りについた。

その後、翔とまさきを除いて、みんなは遊びを中断しそれぞれ帰宅

したことを、あたしは目が覚めてから知った。
そしてあたしは夢と現実の狭間で、翔とまさきが何やら会話をしていることを耳にしていたが、あまりの曖昧な意識の中で、２人が一体どんな会話をしていたのか、その内容までは知る由がなかった。

最後の夏（後書き）

古月ひなこです。
いつもご愛読いただき、誠にありがとうございます。
そろそろ最終回が迫ってまいりました。
最後までお楽しみいただけますよう、よろしくお願いします。

取り戻せない距離

「みゆが酒飲めないの知らなかったの？」
翔のキツイ問いかけに、まさきは何も答えることができなかった。
「みゆは今までも酒飲むと自分で立っていられないくらい酔うことがあったから、いつも飲みすぎるなって言ってたんだよ。みゆとかなり仲良くしてるみたいだけど、そんなことも知らなかったのか？みゆもみゆだよ。飲めない酒飲んで、その上すぐに水に入るなんて。」
しばらく黙っていたまさきも口を開いた。
「みゆは私の話聞いてくれてただけだよ。それにみゆも悩んでることあったみたいだし。みゆのことあんまり叱らないでやってくれますか？」
「そんなことアンタに言われる筋合いねーよ。」
翔はまさきの言葉をきっぱり切り捨てた。そして続けた。
「お前たち酒飲みながら何話してたんだよ？またみゆを誑(たぶら)かしてたのか？」
まさきは一息ついて再び話し始めた。
「この間も言ったとおり、私はみゆが好きだよ。私はみゆと翔さんが別れてほしいなんて言うつもりはない。でもみゆを想う気持ちは誰にも負けない。みゆを愛してる！」
まさきが翔に向ける眼差しは真剣そのものだった。
真っ向からはっきりとその言葉を聞いた翔は、驚きとやや怯(ひる)んだ表情を隠しきれなかったが、すぐに険しい表情に戻った。
「アンタの気持ちが誰にも負けないなんてどうして言えるんだよ。俺とみゆが付き合ってきた3年間をアンタ知ってんのか？だいたい百歩譲ってアンタがみゆを想ってること認めたとしても、女のお前がこれ以上何ができるって言うんだよ。」
「人を想う心に女とか男とか関係ないだろ？」

まさきのこの言葉に、翔は呆れた笑いを見せた。
「アンタ本気でそう思ってんのか？アンタがみゆのことどう想おうが関係ないけどな。みゆの気持ちを振り回すのはもうやめてくれよ。俺たちはこれから結婚して子供生んで幸せな家庭を築くっていう未来があるんだよ。アンタの言う愛情は所詮一時的なものに過ぎないだろ。みゆを好きとか言ったところで、みゆの思い描いてるようなごく平凡な家庭を築いてあげることできるのか？一生彼女を守ることできるのか？女が女を幸せにするなんて絶対不可能なことなんだよ。」
現実的な翔の言葉にもめげず、まさきも翔に対抗した。
「私は女同士とかそういうことにこだわってるわけじゃない。私が男として生まれようが女として生まれようが、みゆと出逢った以上、私がみゆを愛してることは誰にも変えられない。普通の男女の幸せとは違う形かもしれないけど、もしみゆが本気で望むなら、私はみゆを奪って一生みゆを守っていく自信はある！」
まさきは翔の目をまっすぐ見据えた。
翔はこのやりとりで激しく興奮し切った心をもう一度落ち着けるように、深く一息呼吸をついた。
「じゃあ、みゆが小さい子供すごく好きなのは知ってるか？みゆは結婚したら子供がほしいってずっと言ってた。女のアンタがいくら強がったって、みゆにその夢を叶えてあげることはアンタにはできない。それにさっきだって、みゆが溺れかけた時みゆを抱き上げて救うこともできなかった。もし俺がいなかったら、みゆは溺れてたかもしれないんだぞ。お前にみゆを助ける力があったのか？女を守る力を持ってるのは男だけなんだよ。女のお前がみゆを一生守るなんてそんなこと軽々しく言うなよ。」
翔の最後の言葉に、まさきは一撃を喰らわされたようにそれ以上何も言い返すことはできなかった。

あたしの夢の中で翔とまさきの声が遠くに聞こえた。でも2人が一体何を話しているのかは全く分からなかった。
ゆっくりと現実に引き戻されたあたしは、うっすらと目を開けた。すると、あたしの両脇で只ならぬシリアスな表情を浮かべた2人の様子が見え、あたしは一気にはっきりと意識を取り戻した。
「みゆ、気分はどう？」
目を覚ましたあたしに気づいたまさきは、あたしに向かって優しい表情を向けた。
「うん。もう大丈夫。心配かけてごめんね。」
「なら安心した。じゃあ私はそろそろ家に帰るよ。みゆ、翔さんが付いてるから安心して。今日は帰ったら早く休めよ。」
まさきは笑顔でそう言い残してあたしに背を向けた。まさきの優しい口調とは裏腹に、彼女の手が終始こぶしを強く握り締められているのにあたしは気づいていた。
その様子から、あたしが眠っている間、翔とまさきとの間で何でもない会話がされていたとは思えなかった。

あたしはどのくらいの時間眠りについていたのだろう。
辺りはすっかり人気（ひとけ）がなくなり、空はまだ明るさを保っているもののうっすらオレンジ色に染まっていた。
翔はあたしの帰り支度をした後、車であたしを家まで送ってくれた。
車の中であたしたちの間に会話はなかった。
無言で運転する翔の横顔に、あたしは何を話しかけていいのか、ましてやまさきとどんな会話をしていたかなんて聞くことはできなかった。
「翔、今日はごめんね・・・。おやすみなさい。」
翔の車があたしの自宅に到着すると、あたしは翔にこう言い残して、車から降りようとした。
すると翔はパッとあたしの手を掴んだ。
「みゆ。今日みゆが溺れそうになって俺ほんと怖かったんだ。俺の

為にももうあんな無茶なことはしないでくれよな。・・・それから、お前を守れるのも俺だけだから。」
翔の言葉の中に含まれたいろんな深い意味を、あたしはすぐに察した。
あたしは小さくうなずくと、翔の車を降りた。
部屋に戻ったあたしは、一人ベッドの上で横たわりながら考えた。
それはもちろんまさきと翔のこと。
今日あたしが溺れかけた時とっさにあたしを助けてくれたのは翔だった。
翔はあたしがお酒に酔ってしまったことも、水に沈みかけたことも、何もかも見ていてくれた。そして誰よりも早くあたしを救ってくれた。翔には全てを任せられる安心感がある。
その一方で、あたしと翔の姿を悲しい目で見つめるまさきの顔が思い浮かんだ。
まさきは性別を超えてあたしを本気で愛していると言ってくれた。
まさきはいつでもあたしを理解し、あたしの味方でいてくれる。
でもそれより何よりあたし自身が、例え何を失ったとしても、どんな試練や困難があったとしても、まさきとずっと一緒にいたい、まさきを放っておくことはできない、その気持ちがあたしの本心だった。

夏も終わり、日々朝晩の気温が下がっていく。
相変わらず真昼の強い日差しは照り続けるものの、肌を吹き抜ける風はひんやりした秋の匂いがする。
そしてあの日からあたしのまさきへの想いは全く変わっていないのに、この秋の冷たい風のように、まさきのあたしへの態度にも変化を感じていた。
今まで社内で毎日あたしのところに顔を出しては、くったくのない笑顔であたしに懐いてきたまさき。
あの日、海であたしが溺れかけた事件以来、まさきは確実にあたし

に顔を合わせる回数が減り、あたしに対するあの優しい笑顔、あたしを笑わせる明るいおしゃべりがめっきりなくなった。何だかあたしに遠慮しているような、あたしを避けているような、そんな気がしてならなかった。
そんなまさきの変化に、あたしは違和感を感じつつも、どうしてまさきがそういう態度を取るのか、まさきに問い詰める勇気は私にはなかった。それを聞いたらまさきとの距離がもっと離れてしまう、何だかそんな気がしたから。

そんなぎこちないまさきとの関係が続いて一ヶ月。気候はすでに肌寒いくらいになっていた。
毎日お昼休みになると欠かさずあたしの元に迎えに来る翔は、この日もあたしの前でスパゲティを頬張りながら、自分の会社でのたわいもない出来事をあたしに語っていた。
あたしは翔とのこの何でもない会話をする時間がすごく好きだ。
そしていつもはあたしよりも数倍頭が賢くて、何でも完璧にやりこなす彼が、時々ある出来事についてあたしならどう考えるか、どう解決するのか、そんなことをあたしに相談してくる彼の姿が、ちょっとだけ可愛く思えてしまう。
「あ、そうだ。みゆ。また来週から俺出張があってしばらく会えないんだ。ごめんな。」
ふいに思い出したように翔が切り出した。
「そうなんだ。どのくらい行って来るの？」
「二ヶ月くらいかな。」
「そっか。」
彼があたしの元を離れるのには慣れているけど、ここ数ヶ月毎日あたしのところに通いつめていたためか、翔との時間がいつの間にか当たり前になっていた。翔とのしばしのお別れに、少しだけしょげたあたしはそれ以上何を言ったらいいのか思い浮かばなかった。
翔はあたしのそんな様子を見ると、おもむろにあたしの手を取り、

あたしの薬指にはめられたリングを指でなぞると、そのまま彼の指にもはめられた同じリングの上にあたしのもう一つのリングを重ね合わせた。
「お前の誕生日には間に合うように帰ってくる。俺が出張から帰ってきたら、結婚の段取り本格的に始めような。」
彼はいつにもない優しい声でそうあたしに囁いた。
その言葉に答えることもうなずくこともできないでいるあたしの反応に、彼は全く気にもしない様子で。

翔はその一週間後、二ヶ月の海外出張に飛び立って行った。
なんだか取り残された気分のあたしは、この日から一人のお昼休みを過ごした。
翔があたしのところに毎日通いつめるようになってからは、まさきとランチをとる習慣もすっかりなくなって、ましてやまさきとの間がぎこちなくなっている今、まさきをランチに誘う気にはなれなかった。
言うまでもなく、同僚の永田あさみらを誘って明るく食事を取る気分にもなれなかった。

この日もあたしは午前の仕事が終わると、一人で食事に出かける準備をしていた。
すると早足であたしのデスクに向かってくる人影が見えた。
それはまさきだった。
なんだかまさきの顔を見ると、今まで抱えてきた想いが吹き出してくるように、あたしはとっさにまさきに話しかけた。
「まさき！仕事終わったんでしょ？一緒にランチ行こうよ！」
思い切ってまさきを誘ってみたけど、まさきから返された言葉はあたしの期待していたものではなかった。
「ごめん、今この書類みゆに渡しに来ただけなんだ。昼は他の人とアポがあるから。」

そう言って、彼女はあたしに顔を向けることもなく、そそくさと去っていった。
どうしてこんなにあたしに冷たいの？あたしのこと好きでいてくれてたんじゃなかったの？
もうあたしに対する気持ちは冷めちゃったの？
まさきへの疑問と憤りの気持ちがあたしの心の中を交叉した。
そして完全にまさきの姿が見えなくなって、あたしは深い悲しみに襲われた。
この時誰かが一言あたしに声をかけてきたのなら、すぐにでもあたしの目から涙があふれてきそうだった。

何の隔たりもなく自分の全てを語ってくれた彼女。仕事でピンチになった時はいつもあたしを助け励ましてくれた彼女。そしてあたしのことを愛してると言って抱きしめてくれた彼女のぬくもり。
あたしをいつも笑顔でいさせてくれるまさきの存在が、あたしの中でこんなにも大きくなっていたなんて、改めて思い知らされた。
一人公園でサンドウィッチを一口一口小さくかじりながら、あたしの頭に浮かぶのは全て、あたしに優しく笑いかけてくれるまさきの顔だった。
まさきがどうしてあたしに冷たくなったのか、あたしは想像すらつかなかったけれど、まさきのことだから、いつかケロッと何事もなかったかのように、あたしに笑いかけてくれる日が来る、あたしはそう信じたかった。
そんなあたしの一掴みの望みとは裏腹に、まさきはあたしに笑いかけてくれるどころか、同じ社内にいながら一日中あたしに顔を見せることもなかった。

そんなある日、あたしはまさきのいる営業部に書類を渡す用を頼まれ、まさきのデスクの方角に向かった。
するとちょうど営業部のドアから廊下を歩いてくるまさきが見えた。

あたしはどういう顔で挨拶したらいいかもわからない状態だったけれど、何とか笑顔を取り繕って彼女に向かって右手を小さく振った。
「まさき。」
あたしのその声に、彼女はあからさまに気づかない振りをして、すーっとあたしの横を通り過ぎようとした。
彼女のあまりのそっけない態度に、必死に塞き止めていたあたしの中の悲しみや不安、憤りが、この瞬間一気に爆発した。
「まさき！どうして？」
あたしの後ろを去っていこうとしたまさきに、あたしはさっと振り返って叫んだ。
その時のあたしは、もう社内の廊下だろうが何だろうが関係なく、かなりの大きな声で叫んでいることに自分でも気づかないほど動揺していた。
あたしが初めて出す大きな声に、まさきは驚いて振り向いた。
「あたし、まさきに嫌われるようなことした？」
あたしの目には今にも涙があふれんばかりに溜まっていた。
まさきは黙ったままだった。
「もうあたしわかんないよ！まさきが何考えてるのかわかんない！」
あたしが激しく言葉を続けると、あたしの目に溜まっていた涙もポロポロと頬を伝った。
するとまさきが今までに見たこともない険しい顔つきで、あたしの方に向かってきた。
そして次の瞬間、まさきはあたしの腕を強く掴むと、すごい速さで歩きだした。
まさきがあたしを引っ張りながら向かった先は、社内の全ての情報資料が収納されている書庫だった。
そう・・・。ここは日の暮れかけたあの日、まさきがあたしに告白してくれた思い出の場所。
すっかり動揺しきって、涙でぐちゃぐちゃになったあたしを、まさ

きはさっきまでのあたしの腕を強く掴んだ様子とは打って変わり、優しく窓際に連れて行き、あたしを座らせた。
まさきは両手であたしの涙をぬぐって話し出した。
「みゆ。ごめんね。みゆに悲しい思いさせちゃったな。」
まさきはとても優しくあたしの髪をなでた。
「まさき、どうしてあたしを避けてたの？あたしのこと嫌になっちゃった？」
あたしのこの問いかけに、まさきは大きく頭を横に振ると、あたしをぎゅっと抱きしめた。
「みゆ、違うよ。ごめん、ごめんね。こんなに悲しませてごめんな。」
まさきはあたしを抱きしめながら何度も謝り続けた。
しばらくあたしを抱きしめていたまさきは、ようやくあたしの肩を解放した。
「みゆ、今度私に付き合ってくれる？」
「ん？」
「みゆを連れて行きたい場所があるんだ。」
まさきはそれだけあたしに伝えると、くるっと振り返って仕事場に戻っていった。

その後もまさきはあたしの元に訪れることはなかった。
でもあの日、書庫の中で彼女があたしに何度も謝ってくれたこと、あたしを抱きしめてくれたこと、そしてあたしをある場所へ連れて行きたいと言った彼女の言葉に支えられ、あたしは彼女を信じることにした。

寒さが日に日に厳しさを増していく１１月。
その１１月最後の金曜日、仕事に集中するあたしの元にまさきが突然現れた。
「みゆ！仕事は順調？」

まさきはおどけてドアから顔出した。その彼女の様子は、久しぶりに見る、あのいつもの明るい彼女の姿だった。
「みゆ、明日あけといて。みゆを連れて行きたいところがあるから。」
まさきが最初あたしにそう告げてから、もう何日も経っていたが、あたしはその言葉を忘れてはいなかった。
今のあたしは、まさきに誘われて断る理由は何もなかった。
「うん。わかった。楽しみにしてるね。」
あたしもまさきがどこにあたしを連れ出そうとしているかについては敢えて問わなかった。
その日あたしは家に帰ると、明日のまさきとの約束に、自分でも信じられないほどドキドキして、どんな服を着ていこうか、靴は何を履いていこうか、あらゆることを考えた。

次の日、一日中悩んだ挙句、あたしは一番お気に入りの服の中の一枚、首元にフワフワ毛皮のついた黒のワンピースと、黒のリボンがついたちょっと高めのヒールを履いて、まさきのいつものモノクロスタイルを気にしながら、自分を着飾ってみた。
夜の6時を回って、まさきとの待ち合わせの場所に向かったあたしは、すでにあたしを待っていたまさきを目にした。
まさきはこの日、いつもとは少し型の違う黒のパンツスーツに、首元にはスカーフ風のネクタイがコートから覗いて、スラっと伸びた長身がさらに美しく見える完璧なスタイルに、あたしはしばらく見とれてしまった。
「みゆ、なんか今日は雰囲気が違う。私の為におしゃれしてきてくれたの？」
まさきはあたしを一目見てそう言った。
「ふふ、まあね。」
あたしは曖昧にそう答えつつ、まさか昨日の晩から今日着ていくアイテムにあれこれ悩んでいたことなど恥ずかしくて言えなかった。

でもまさきの目を見ていると、何だか全て見透かされているような、いつもそんな感じがする。
「みゆ、今日はほんとにきれいだね。」
まさきは真剣な顔であたしに向かってそう言うと、あたしの右手をとった。
そしてあたしたちは指と指をからませてお互いの手を強く握り合って歩き出した。
夜のイルミネーションがキラキラ輝き始めた街は、こうしてまさきと手をつないで歩いていると、より一層あたしの目に美しく輝いた。

取り戻せない距離（後書き）

古月ひなこです。
いつも愛読してくださって、誠にありがとうございます。
次回最終話。
どうぞお楽しみに。。。

永遠の約束（前書き）

古月ひなこです。
とうとう最終話、最後までお楽しみください。

永遠の約束

彼女とつないだ指先がとても熱い。まるでその手からあたしの全身が溶けていくみたい。
あたしは肩をごく自然に彼女の体に寄せながら彼女の顔を見上げた。
まさきは前を見つめながら、何の言葉もないものの、顔をわずかにあたしの頭に寄せた。
このまま時が止まってほしい、あたしは心からそう願った。

まさきがあたしを連れて向かった先は、高層ビルの最上階にあるバーだった。
ドアを入って真っ暗な短い道を抜けると、そこにはおしゃれな内装と少し薄暗いライトアップが印象的なフロアが広がった。
まさきはその店主と顔見知りらしく、彼と目で合図をすると、あたしの手を引きながら迷わず指定さた奥の席に向かった。
あたしはまさきにエスコートされるがまま、その席に腰をかけた。
カウンター型になっているその席は、2人が並んで窓の方に向いて、座ると目の前に遠く下一面に広がる美しい夜景を一望できるようになっていた。
「きれいだろ？」
あまりの夜景の美しさに言葉を失うあたしに、肩を並べて座ったまさきが覗き込んだ。
美しいネオンに心を奪われた上、店内の優しいライトに浮かんだまさきの顔が、あたしの呼吸音まで聞こえてしまうんじゃないかと思うくらいの距離に近づいて、あたしはまるで夢の中、ううん、というよりは現実の世界から離れ、遥か遠くの見知らぬ世界に舞い込んできたような、そんな感覚に陥った。
「ここはね、私が知ってるバーで一番いいとこ。ムードも最高だろ？でもそれだけじゃなくて、マスターが作るカクテルも格別なんだ。

」
まさきはそう言うと、後ろを振り返って再び店主に向かって軽く手を挙げた。
「まさきはよくここに来るの？」
「うん。悩みがあったり一人になりたい時はよくここに来るんだ。みゆ気に入ってくれた？」
「へぇ～。まさきってこんなに素敵なバーによく来るのね。」
なんだかお酒を飲めない上に、こういう場所に全く来たことのないあたしにとって、自分が知らない世界を知る彼女がすごく大人に見えた。
あたしとまさきはしばらく黙ったまま、目の前の夜景に見入っていると、店主が2つのカクテルをあたしたちのテーブルに運んできた。あたしの前に出されたカクテルは淡い透き通ったピンク色。グラスの上の方から下の深いところになるにしたがって真っ赤なルビー色に染まっていって、グラスの淵にはキラキラ光るサルトと可愛らしいチェリーが添えられていた。
「きれいなカクテル・・・」
「まさきさんがね、あなたの為に前から試行錯誤して作ってたカクテルなんですよ。」
カクテルの美しさに見とれていたあたしは、店主のその言葉にまたまた目を白黒させた。
「え？これまさきがあたしの為に？」
あたしの驚いた顔に、まさきは微笑を浮かべながら静かに話し始めた。
「まぁね。でも安心して。アルコールはあんまり入ってないから。みゆがほんとに酒飲めないの知らなくて、この間はあんな飲ませ方しちゃってごめんね。そのせいでみゆを危ない目に会わせちゃって・・・。みゆにあのままお酒に対しても私に対しても嫌な印象のままでいさせたくなかったんだ。」
まさきの語る言葉に、あたしはずっと彼女を見つめながら聞き入っ

た。
「この色はみゆの純粋で可愛らしいピンク色、それからグラスの下に行くほど深い赤になっていくのは、みゆという女性が知れば知るほど可愛いだけじゃなくて、芯が強く表には見えない情熱を心に潜めてる深みのある女性だっていうイメージ。サルトとチェリーもみゆの可愛さと美しさのイメージから添えたもの。カクテルの味はみゆが大好きな甘い香り。ね？みゆにぴったりだろ？」
こんな風にカクテルで人を表現できるんだということをあたしは初めて知った。
でもそれより何より、まさきがそんな風にあたしのことをちゃんと見ていてくれたことに、あたしの心は感激の気持ちでいっぱいになった。
まさきは目の前に置かれた暗いパープルに輝いたカクテルグラスを持つと、あたしのグラスと軽くカチンっと乾杯してゆっくり味わうように飲み始めた。
あたしも彼女に続いて一口カクテルを口にした。
甘いのにさっぱりとしたトロピカルな香りが口いっぱいに広がった。
あたしの顔から思わず笑顔がこぼれた。
「前にもみゆに言ったことがあるけど、私はアメリカにいた時、働きながらバーテンダーの修行してたんだ。いつかこうやって、一人一人のお客さんにふさわしいカクテルを作って、世間話でもしながら相手を喜ばせてあげられたらなぁってずっと思ってるんだ。」
まさきは目の前の夜景を見つめながら思いに耽(ふけ)っているようだった。
「まさきならきっとその夢叶えられるよ。だってあたし、こんなにきれいでこんなに味わい深いお酒初めて飲んだもの。なんか今までのお酒に対するイメージが全く変わったよ。一口のカクテルがこんなに人を幸せな気持ちにさせることができるのね。」
あたしの言葉にまさきは優しく微笑んだ。
あたしとまさきは2人並んで、しばらく黙ったままカクテルと夜景

を楽しんだ。
あたしはずーっとずーっとこの時間が続いてほしいと思うほどその時間が心地よかった。
それはまさきがあたしの為に作ってくれたこのカクテルのせい？それともお金とも変えられないぐらいの美しい夜景のせい？このバーの落ち着いたムードのせい？
ううん、どれも一番の理由にはならない。これらのものすべてが心を溶かすほどあたしの目に美しく映るのは、今こうやってまさきがあたしの隣にいてくれるから。
あたしの心の中ではそれがはっきりしていた。

そんなあたしの横顔を見ながら、まさきはあたしの心の中を知ってか知らずか、そっとあたしの手をとり、テーブルの上であたしの手を強くしっかりと握った。
彼女は握り合ったあたしたちの手を見つめながら口を開いた。
「最後にみゆをここに連れてこれてほんとによかった。」
・・・？
「最後・・・って？」
まさきの言葉の意味があたしは全く分からなかった。
「今日ここにみゆを連れてきたのは、私の中で決めたことがあったからなんだ。」
あたしはきょとんとした顔でまさきを見つめた。
まさきは次の言葉がなかなか出てこないといった感じで、あたしの手をぎゅっとさらに強く握った。
「みゆ。私、今日を最後に会社辞めてきたんだ。そして・・・みゆとこうやって会うのも今日が最後。これからは私の事もう忘れて・・・。」
まさき？一体なに言ってるの？？
まさきの言ってることがどういう意味なのか全く分からない。
「みゆには今の彼氏と結婚して幸せな家庭を築く未来があるし、私

もバーテンダーになる夢があるから・・・だから」
「ちょっと待って。まさき突然どういうこと？」
あたしはまさきの言葉を振り切って彼女に問いかけた。
もしかしてまさき、今あたしに別れを告げてるの？？
あたしはまさきとこうやっていつも一緒にいられる、それだけでいいのに。
なぜそんなことをわざわざ今言い出すの？？
事態が全くつかめずに、でもあたしのさっきまでの幸せな気持ちが一気に崖に突き落とされた、そのことだけは確かだった。
「そんな顔するなよぉ、みゆ。」
まさきはあたしの手を握ったまま、もう一方の手であたしの頬をつねった。
まさきはあからさまに平静を装おうとしていた。
「ほら、みゆと私はずーっと一緒にいれる訳じゃないだろ？まさかみゆ、彼氏と別れて私とずーっと一緒にいるつもり？そんなことできっこないじゃん。」
まさきはおどけながら言った。この質問があたしにとってこれ以上ない深刻な問題だとは思いもしない、そんな表情で。
「まさきはあたしを愛してるって言ってくれたよね？」
あたしの問いかけに、まさきは黙ったままだった。
「まさきのあたしへの想いってそんなに簡単なものだったの？あたしは・・・あたしはずっとまさきと一緒にいたいと思ってるよ！翔はあたしにとって大事な人だけど、今のあたしは・・・正直なあたしの気持ちは・・・あたしはあなたとずっと一緒にいたいの！」
あたしは自分でも気づかないうちに強い口調になっていた。
今まで当たり前のようにあたしのそばにいてくれたまさきが、今あたしの元から離れようとしている、この現実を受け止めることはどうしてもできなかった。
まさきは終始下を向いたまま、でもあたしの手をしっかりと握ったまま話し続けた。

「みゆ・・・子供染みたこと言うなよ。もっと現実を見ろよ。一生私と一緒にいれるわけないだろ？私はみゆの思い描いてるような未来を築いてあげることはできない。遅かれ早かれ私たちに別れが来るのは分かり切ってることなんだから。」
まさきの言葉を聞きながら、あたしの目には涙がたまった。こらえることのできない涙が、ついにあふれてあたしの頬を伝わった。
「あたしはまさきのことこんなに愛してるのに。まさきと一緒にいられるなら、どんなことを捨ててもあなたと一緒にいたいって、そう思ってるのに・・・。なんでまさきはそんなに冷静に現実的なことばかり言うの？」
あたしのこの言葉と、あたしのあふれる涙に、まさきはついに顔を上げ、あたしの目を見つめて言った。
「みゆ！お願いだから、何も言わずに静かに別れさせて・・・。みゆが泣いてるとこ見たら、また心が揺らぎそうになるから。」
彼女はあたしの涙をぬぐった。
彼女の手があたしの頬を優しく撫でるその温かさは、いつかもまた同じシチュエーションでこんな風に彼女があたしを慰めてくれたのを思い出し、あたしの涙はさらに勢いを増して流れ続けた。

少しの間をおいて、呼吸をなんとか落ち着けたあたしはまさきに言葉をかけた。
「まさき・・・あなたは今もあたしのこと愛してくれてる？それとも他に好きになる人ができたの？」
まさきは少し考え込んでいるかのようだったが、すぐに大きく首を横に振った。
「私がみゆのこと何とも想ってなかったら、会社辞めるなんてことまで決心できないよ。」
「だったらなんで？」
「みゆのこれからの幸せが私の幸せそのものだから・・・。」
まさきはこの一言を言うのが精一杯といった感じで、それ以降口を

閉ざした。
あたしたちは強く手を握り合ったまま、しばらく沈黙を貫いた。
「まさき・・・。あたしたちが出会った日のこと、覚えてる？」
沈黙を破って、あたしはまさきにずっと話したいと思っていたことを切り出した。
「覚えてるよ。あの日から今日までみゆと一緒に過ごした時間の中で忘れた瞬間なんて一つもないよ。全部覚えてる。」
まさきはあたしの質問に何の迷いもなくそう答えた。
まさきの答えを聞いてあたしは話し続けた。
「でもまさきが知らないことが一つあるのよ。」
まさきはきょとんとした顔であたしを見つめた。
「まさきが突然あたしの前に現われたあの日、初対面なのにあたしの手を引っ張って。なんなの？この子って最初は正直あなたのことそう思ったの。でもね、実はあの日あたしの誕生日だったんだ。彼も出張でそばにいなくて、仕事もなかなか終わらなくて、お祝いしてくれる人もいなくて、今年はなんにもなくその日が終わっちゃうのかなぁなんて思ってた時にあなたが現われたの。あなたがあたしにくれたチョコレートがなんだかすごくすごく嬉しくて。まさきに出遭ったあの日からあたしはあなたのこと特別な存在って思ってたのかもしれない。あの日からまさきとの一緒に過ごした時間、まさきがあたしにかけてくれた一言一言、全部大切な思い出としてあたしの心にちゃんと残ってるよ。あなたとの思い出を思い出なんかで終わらせたくないよ。だからまさき。そんなに簡単に忘れるなんてこと言わないで。まさきと過ごした時間の中で私が忘れられることなんて一つもあるわけないじゃない。ねえお願いだから・・・。」
そこまで話しかけたあたしはまさきの顔を見て思わず言葉を詰まらせた。
だってその時まさきの目には涙がとめどなくあふれてたから。まさきが泣いてるところなんて見たことのなかったあたしは思わず言葉

を失った。
まさきは下を向いて握った手を小さく震わせ泣き続けた。
まさきの初めて泣く姿にあたしはどうすることもできなかった。
まさき、どうして？こんなにもあなたとの別れが辛くて苦しいのに、
あたしたちはどうしても別れを選ばなければいけないの？？
まさきの選択した結論にどうしても納得できないあたしは、耐えられずに口を開いた。
「あたし、まさきのそばにずっといるよ。どんなことも覚悟できるよ。だってこんなにまさきのこと愛してるもの！自分に嘘なんてつけないよ。」
あたしの言葉にまさきは自分の手であたしの口をふさいだ。
「もう何も言わないで、みゆ。」
まさきの涙は止まっていた。まさきはゆっくりあたしをなだめるように話し始めた。
「みゆ。みゆは可愛いし、優秀だし、仕事だけじゃなく、家庭を持ってもきっと素晴らしいお嫁さんになれる。最高のお母さんにもなれる。これから女性としての幸せをたくさん掴める未来が待ってる。私の今までの人生の中で、みゆは最高の女の子だよ。だから私はこんなにもみゆを愛してるんだと思う。でも私がみゆを幸せにしてあげることはできないって自分で気づいたんだ。私がみゆの同性として生まれてきたこと恨んでも恨んでも恨み切れない。」
「まさきがあたしの元からいなくなったら、あたしに幸せなんて何も残らないよ。」
「みゆには翔さんがいるじゃない。悔しいけど、彼はみゆのことちゃんと愛してくれてるし、みゆを守ってくれる。将来の事もちゃんと考えてくれてる。彼なら安心してみゆのこと一生見てくれるって信じてる。それに、みゆには想ってくれてる両親がいる。両親を悲しませるようなことしないで。親が生きてる間にたくさん親孝行もしなきゃいけないだろ。」
涙でぐちゃぐちゃになったあたしの顔を、まさきは優しい穏やかな

表情で見つめながら続けた。
「みゆ。私の為にもみゆが幸せになれる道を選んで。みゆは賢いんだから、こんなことでみゆの可能性を閉ざさないで。私はみゆと一緒にはいられないけど、どこにいたってみゆの味方だよ。みゆがほんとの幸せを掴んだ時、私も初めて幸せになれるんだから。」
悲しくて悲しくてどうしようもない自分の気持ち。でもまさきが心からあたしの幸せを願ってくれている。まさきは誰よりも本気であたしの未来を考えてくれてるからこそ、こうしてあたしとの別れを選択したんだということが、この時受け止めたくなくとも痛いほど分かってしまった。
そのまさきの身を切るような選択に、あたしは答えることしかできないとそう思った。

あたしは目の前に広がる夜景をしっかりと目に焼き付けながら、ゆっくりと深呼吸した。
「まさき。あなたに出遭ってほんとによかった。まさきを愛せたこと、あたし一生忘れたりなんてしないよ。絶対忘れない！まさきと一緒に過ごした一瞬一瞬、あたしにとっては宝物だから。」
あたしは自分に言い聞かせるように、そしていろんな想いを振り切るように強く、そして笑顔でまさきに言った。
「うん、うん。みゆ、ありがとな！」
まさきはあたしの頭を優しく撫でながら、彼女もまたあたしに笑い返した。
あたしはもうこれ以上泣き顔をまさきに見せられない、その一心でついに席を立った。
「またいつかね！さよなら、まさき。」
「みゆ・・・さよな、、ら。・・・・・・。」
もう涙が目の奥のすぐそこまで湧き上がってくるのを感じながら、あたしはまさきの顔を最後に目に焼き付けると、振り返らずに一気に外に向かって歩き出した。まさきが最後に何かを口にしたのも聞

かずに。
バーの扉から外に出た瞬間、必死に我慢していた涙が、小さく漏れる息の音とともに途切れることなく流れ続けた。

目を閉じると、あの宝石みたいな夜景と愛しいまさきの顔が、あたしの瞼の奥にしっかりと焼きついている。この手を握る温かいまさきの手のぬくもりが、そっくりそのまま残ってる。
あたしの２８歳の誕生日から、まさきと過ごした1年に満たないこの月日は、あたしの心にしっかりと刻まれている。まさきがいなくなった今もしっかりとあたしの心に・・・。

週末が明け、いつもの仕事の毎日が始まった。
そこにはまさきの姿はすっかりなくなっていた。会社の中の全てがまさきとの思い出だらけなのに。彼女だけがもうここにはいない。

まさきに出遭って1年。あたしの２９歳の誕生日。
翔は約束どおり出張から帰ってきた。彼は出張中もあたしとの結婚のことを考え密かに段取りを進めていてくれた。
それからあたしと翔は結婚へ順調に準備を進め、年が明けたその春、あたしたちは結婚した。

寿退社をして、あたしは自分の憧れていたとおり、今翔の奥さんとして理想の主婦を目指して日々奮闘している。
そして今あたしのおなかの中には新しい命が宿っている。
自分自身の幸せを掴むことにあたしは今必死だ。もうすぐ母親になろうとしている今、まだ始まったばかりではあるけれど、それは着実に実現されつつある。
あの時まさきと約束したこと、あたしは一日だって忘れたことなんてない。
あたしが幸せになること、それがまさきの一番願っていたこと。

そしてあたしはいつでもまさきが夢を追って頑張ってる姿が、こうして目を閉じるといつでも蘇ってくる。
いつの日か、お互いが自分の夢を叶え、成長した姿で再会できる日を、心のどこかでずっと待ち焦がれながら・・・。

永遠の約束（後書き）

最後までご愛読いただき、ほんとにほんとにありがとうございました。
実は、作者がずっと聴きながら最終話の原稿を書いていた曲があります。
この曲があまりにも「ＣＲＡＺＹな恋」にぴったりで、私自身、この最終話＋この曲で何とも切なくなってしまいます％＜｜＞％
皆様にも最終話をさらに楽しんでいただく為に、古月ひなこ活動報告でこの曲をご紹介させていただきます。
ご興味のある方は是非作者活動報告の方もご覧ください。

それから、今回最終話であるにも関わらず完結になっていないのは、作者が勝手に続編を予定しております。詳細については活動報告に。。。

届くことのないみゆへの手紙（前書き）

ＣＲＡＺＹな恋、これで完結です。
長らく時間があいてしまい、すみませんでした。。

届くことのないみゆへの手紙

みゆ・・・。
君と出遭ったあの日から、私たちが一緒に過ごした時間の中で、忘れてしまった記憶なんて一つもないよ。
君を愛した一瞬一瞬。私の全てを犠牲にしてもいいと思うほど、私は君を心から愛した・・・。
もうあの日々は帰ってこないんだね。みゆを想うが故に私自身が選んだ結末。それはみゆを手放すこと。
父さんが亡くなった時でさえ涙を流さなかった私も、みゆとの別れを決めたあの日、初めて涙した。でも私は後悔していない。
なぜなら、みゆの幸せは私の幸せそのものだから・・・。

まだ未熟だった私がたった一人で始めたアメリカ暮らし。
アメリカに渡った最初の頃は、頼れる人が誰一人いなくて、１５歳の幼い私にとって決して簡単な生活ではなかった。でもその環境のおかげで、私は強くたくましく生きるすべを身につけた。
バーテンダーになる夢に向かって努力を重ね、いよいよこれからという希望に満ち溢れていた、そんな時突然父の訃報を知らされた。
私はすぐに全てを投げ捨て日本に帰国した。
父を亡くした悲しみに暮れている時間も許されず、私は一人残された母を支えることで精一杯になった。父がいなくなったことで生じた数々の煩わしい処理も母に代って一人でこなした。
それらがひと段落つくと、私は身も心も疲れ果て、家の中にこもるようになった。そんな私を見かねて、私がアメリカにいた頃もずっと連絡を取り合っていた２０年来の親友が、ある企業での働き口を私に紹介してくれた。
今思えば、それが全ての始まりだった。この企業に働くことがなかったなら、みゆとの出遭いもなかったのだから。

入社当日、人事部の人が会社全体の説明と案内をしてくれた。
その人に付いて会社の各部署を回っていると、ふと私の眼に一人の女の子の姿が飛び込んできた。
仕事を夢中で懸命にこなす彼女の姿が、とてもｃｕｔｅでｓｍａｒｔで、私の眼にはそんな彼女がすごく輝いて見えた。
彼女の姿は、父が亡くなって以来私が忘れかけていた、アメリカでの自分を思い出させた。あの頃の私はこんな風に何に対しても前向きに一生懸命で自信に満ち溢れていたはずなのに、いつの間に自分はこんな抜け殻になってしまったんだろうって。
私は思わず人事課の人に尋ねた。
「あの方は何してる人ですか？」
「え、あの子？あぁ、彼女は白井みゆさんって言って、主に秘書の仕事をやってるの。うちの会社の顔と言っていいほど仕事ぶりがよくて、評判もいいのよ。」

白井みゆ・・・。私はその名前を胸に刻み込んだ。

入社して間もなくの頃、まだ試用期間である私は、少しでも仕事が一人前にできるようになろうと、毎日残業をしながら一人会社に残っていた。
そんな時、突然Ａｐｏｉｎｔｍｅｎｔもなく欧米企業の人たちが５時を回って訪れた。
いつも担当している営業部の先輩も不在の中、私はどう処理していいか分からず途方に暮れた。
頼れるのは自分の言語能力だけ。仕事内容の方はまだ半人前の私にとってその時は誰かに頼ることしかできず、必死に社内を走り回って頼れる人を探した。
誰を探せばいいのかさえも見当がつかない状態だったが、我知らず私の走る方向は真っ先にあの時から気になっていた君のところだっ

た。

私の勘どおり、君はまだデスクに残っていた。
挨拶することも忘れて、とにかく早く新顧客の対応をしなければという緊迫感から、強引に君を連れ出していた。
でも君は嫌な顔一つすることなく、突然の私の依頼に応じてこの商談をあっさりとやり遂げた。
みゆが私を助けてくれたことにも感激したけど、それ以上にみゆの才能に一瞬にして惹かれた。
君の輝いている姿を見ていると、自分ももう一度一生懸命だったあの頃に戻りたい、戻ってみせる！と勇気が沸いてくるようだった。
そしてその時から、白井みゆはどんな子なんだろう、今何をしてるんだろう、みゆに会いたい、みゆを毎日見ていたい、みゆをもっと知りたい、みゆの世界を共有したい、君への気持ちだけが私の動力となった。
そう・・・。この時から私は白井みゆに恋をしていた。
私が女の子に恋をしたのはこれが初めてだった。アメリカではボーイフレンドがいたことがあったけど、結婚の話まで進んでいたその相手にあっさり捨てられたことがあった。その時のトラウマから私の中で男ほどくだらないものはないという思いが正直ずっと残っている。それ以来私が彼氏を作らなかったのもそのせいかもしれない。
でもそれが私を女の子への恋に走らせた理由にはならない。
私が男だろうが女だろうが、そしてみゆが女だろうが男だろうが、性別は関係ない。
みゆは私に、人を心から好きになる気持ちを思い出させてくれた。
ただ、何でもストレートに表現する私の性格でも「私がみゆに恋してる」、この事実だけは私の心に留めておかなければいけない、そう思った。
なぜなら君には結婚間近の彼氏がいたから・・・。
以前の私ならみゆに彼氏がいようが何だろうが、好きなものは好き。

と開き直って、すぐにでも君にアタックしていたかもしれない。
でもみゆは私にとって特別な存在だった。
純粋で、真っ直ぐで、汚れない君の真っ白な心を混乱させることはできないと思った。
自分のタメに今まで一生懸命になってきたことは数限りないが、誰かのタメにこんなにも大事にしてあげたいと思ったことは、私にとって初めてだった。

忘年Ｐａｒｔｙが開催されたあの日も、私が準備したＬｉｖｅの全ては君に送るためのものだった。
私のＬｉｖｅであんなにも単純に心から喜んでくれた君の姿を見ているうちに、一瞬自分の理性が飛んで、みゆに触れたいその気持ちだけが膨らんだ私は、気づくと君の頬にＫｉｓｓしていた。
その瞬間から私の君への想いは火がついたように加速していった。

君の彼氏と初めて顔を合わせた日、私は自分の想いを表情に出さないことで精一杯だった。
みゆを想う者同士、みゆの彼氏も私のことを初対面から警戒し、毛嫌いしているのが明らかに感じられた。
みゆの彼氏は、一目で人を見透かすようなそういう目を持っていた。
彼に会った瞬間から、私はコイツに自分のみゆへの気持ちを隠すことはできないと思った。
彼はみゆの仕事への情熱と秀でた能力をまだ知らないでいるものの、みゆへの想いは本物だと、彼がみゆを見つめる眼差しからすぐに感じ取れた。悔しいけれど、それが彼への第一印象だった。

君の細かい表情を見るだけで、君が今何を思って考えてるのかすぐに感じ取ることができるほど、私は君のことをいつもいつも見ていた。
新入社員の紅野りなが入社してきた時も、日に日にみゆが辛そうに

なっていくのを私はとても気になっていた。
私の心配していたとおり、紅野は私たちの敵だと知った。その事件の後、ショックで立ち治れない君を、私は見過ごすことができなくて自分の家に招待した。
君を元気づけたい、そういう想いのほかにもう一つ、ある物を君に渡したかったからだ。
みゆの薬指に毎日はめられているリングを見るたび、私の心は締め付けられるように痛みを感じていた。
子供染みてると自分でも思うけど、私にもみゆとつながってるモノがほしかった。

君が母さんと楽しそうに話してる姿、父さんの写真の前で手を合わせている姿、私の部屋でごく自然にくつろいでる姿を見ているうちに、なんだか君のことが更に愛おしく思えた。
君がふと、私たち2人は父さんによって巡り合えたと言ったその言葉を聞いて、私は心の底から感動した。
だってそれは私もずっと心に思っていたことだったから。私にとって父さんの死から初めて喜びを感じることができた君との日々は、まさしく父さんが天国からくれたプレゼントだと信じてた。
そんなことガラじゃなくて他の人には絶対言えないけど、みゆは私のその気持ちをそのまま真っ直ぐに表現してくれた。
その瞬間、ずっとずっと隠していたみゆへの想いが私の心の限界に達し、もうみゆに隠し続けることはできなくなった。
私は君を抱きしめ、正直な気持ちをそのまま告げた。
「Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ．．．」
君は顔を赤らめながら、私が手渡したペアのストラップをぎゅっと握り締めた。そんな君がとても可愛いと心から思った。

私の携帯にぶら下がるネコのストラップが、愛しいみゆの元でも揺れている。

こんな小さなことでさえ幸せに感じる自分がいた。とても新鮮な気持ち。
君に出会う前の自分からは想像すらつかない。私の君への気持ちはもう止められなかった。

お盆前の社内全体整理の時も、私の頭の中には、君は何をしてるのか、そんなことで頭がいっぱいになって、自分の仕事を最速で終えると、真っ先に君の元に向かった。
私の心配していたとおり、君は書庫の中で一人汗ばみながら書類に埋もれていた。
君のタメに少しでも力になりたい、その一心で君と一緒にあの膨大な量の書類を無我夢中で片付けた。
汗にまみれながら作業し続けたが、みゆと2人で同じ仕事をしているその時間が、私にとってはすごく幸せなひと時だった。
気づくと窓の外はすっかり日が暮れ始めていた。
その時、みゆの手が私の手に触れ、君が一瞬私に意識したのが分かった。
小さく緊張する君の様子が肌で伝わってきて、作業に夢中だった私もその時初めて同じ空間でみゆと2人きりだということに気づいた。
ふと顔を上げて見つめた君の額や首には汗が光っていた。
こんな量の書類を一人でやろうとしていたなんて、みゆはほんとにバカだな。私がＨｅｌｐに来なかったら何日もかけて一人で苦労して片付けるつもりだったのかな。。。
みゆの頑張ってる姿を見ながらそんなことを思って、君をこれからずっと守ってあげたいと思った。
その想いが私の心のすべてを満たした時、たまらず私は自分の想いを君に告げた。

「みゆ、愛してる・・・」

2度目となる告白だったけど、みゆへの真っ直ぐな想いをもう一度伝えずにはいられなかった。もうその想いだけが私の全てだった。
でも次の瞬間、思いがけない答えが君の口から漏れた。
「私も愛してる・・・。」

君が囁いたその言葉に私は一瞬困惑した。だってあまりにも信じられない言葉だったから。
ほんとに君も私のことを愛してくれているの？
でも君の眼差しがその言葉に偽りがないということを物語っていた。
それは私にとって涙がこぼれそうなほど嬉しく、まるで奇跡のような現実だった。
みゆへのさらなる愛おしさと、あまりの嬉しさと驚きでめちゃくちゃになった顔を君に見られたくないのとで、私は君を強く強く抱きしめた。
君もまた私の背中に手を回し、ぎゅっと私を抱きしめ、私の気持ちに答えてくれた。
みゆのその温もりは今も、そしてこの先ずっとずっと忘れることはないだろう。

みゆも私のことを愛してくれている、この上ないその幸せな事実に反して、君の心の半分には私の他にもう一人、君の彼氏がずっと居座っていることも私は知っていた。
そんな君の姿を見ながら、アイツの元に毎日会いに行く君へのやるせない想い、というよりも、アイツの元に行こうとする君を強引にでも引き止めることができない無力な自分にやるせなかった。
ある日私は思い切って、彼氏の元に出かけていこうとする君を引き止めて、
「もうアイツのところに行かないで・・・」
と言ってみた。
でも私のこの言葉にすごく困惑した君の顔を見て、私は思わず冗談

として終わらせてしまった。
みゆを私とアイツの間で引き合いにして苦しめたくなかった。
この言葉が私の本心からの叫びだったのに・・・。

夏の終わり、思いもかけないアイツの誘いで、みゆと一緒に海に行くことになった。
ビキニ姿の君はほんとに美しかった。
海の波とともに、みゆとの幸せな時間が流れていく。
でもこの時間は長くは続かなかった。
アイツがみゆの背中にローションを塗る姿も、アイツがみゆにキスする姿にも、私は今さら驚くこともショックを受けることもなかったけれど、やっぱりみゆはアイツのモノなのだろうか、みゆが私だけを見つめてくれる日は決して来ないのだろうか、そんなことを思うと堪らなく辛かった。
みゆのくすり指に一日も欠かさずつけられていたリングが、アイツと君を引き離すことができないということを証明しているようで、その現実があまりにも私の心をを苦しめた。
でも君は落ち込む私の隣にそっと座って私に寄り添ってくれた。そんな小さなことでも私は力を与えられるようだった。
みゆがどんな結果を決断しようと、私は自分の全てをかけて君を愛そう、私にはそうすることしかできないと思った。

海辺での時間、私はあまりにも自分の思いに浸りすぎた。
君が私の隣でビールを飲みながら、必死に酔いと闘ってることなんて、全く気づかなかった。
そのせいで君は溺れかけてしまった・・・。
突然意識が朦朧となって水に沈んでいくみゆを、必死に助けようと思っても、私がみゆを水から引き上げることはできなかった。あまりにも無力だった。
一刻を争う事態に私は叫んだ。

「翔さーーん！！！」
無意識にアイツの助けを求めていた。
アイツは私なんかの力とは比べものにならず、ひょいっと軽々君を抱き上げた。
みゆが運ばれた救護室で、アイツは私にきつく問い詰めてきた。
アイツは私が女という身分でみゆを愛していることに激しい批判をぶつけてきた。そんな彼の言葉に私はどうしても納得できなかった。
私がみゆを愛してる想いは誰にも負けない。その自信だけは本物だった。
でもアイツに言われたんだ。
「女を守れるのは男だけだ」って・・・。
悔しいけれど、あの時みゆを救えたのは私ではなくアイツだった。
認めたくないけれど、みゆの明るい将来を支えてあげられるのは私ではなく、やっぱりアイツだと思い知らされた。
みゆをこんなに愛してるのに、自分の手で君を幸せにできない、その現実があまりにも私にとって残酷なものだった。
目を覚ました君に優しく笑いかけるのが、私に残された最後の力だった。

それ以来、職場で君に会わずに過ごすことで私は精一杯だった。
だって、君の顔を一目でも見てしまったら、私の君への想いはまた止められないものになってしまうから。
その時の私には、みゆを愛している自分の気持ちより、みゆに幸せになってほしいと思う気持ちの方が遥かに大きかった。
でも私は気づかなかった。それが君をあんなにも苦しめていたなんて。
君はあの時初めて私に向かって憤りの気持ちをぶつけてきた。そして君の目から涙があふれた。
その涙を見て、私はいてもたってもいられなくなった。
私にとって君の悲しみの涙ほど辛いものはなかった。

私は無我夢中で君の手を引っ張った。そして無意識に向かった先は、君が私に「愛してる」と言ってくれた場所、あの書庫だった。
君の涙を見ながら、私の中で決断した。

もうちゃんと終わりにしよう・・・。

こんな態度で君に示すのではなくて、君を私の愛から解放してあげて、これからずっと君を愛し幸せにしてくれる彼の元に返してあげなきゃ、そう思ったんだ。
それが私の君への最高の愛情にならざるを得なかった。
私は最後となるだろう君のぬくもりを、君を抱きしめながらしっかりとこの体に刻み込んだ。
そして君との最後となるデートを約束して私は背を向けた。

みゆ・・・。
私たちって出会ったことも運命だったけれど、一緒にいられないことも運命なんだね。
なんて悲しい現実なんだろう・・・。
でも私は後悔してないよ。みゆに出会っていなかったら、私の人生なんて何の意味もなかった。今はそんな風に思えるから。

みゆとの最後となったあの日。
私が君を連れて行った場所は、私の一番好きだった場所。そして私の夢がたくさん詰まった場所。
そこで君への一切の想いを断ち切って、私はバーテンダーという夢にまっしぐらに突き進む覚悟を決める為だった。
いつもここに来るたびに私の目に映っていた最高の夜景が、なんだか悲しみの淀みで霞んでいた。
この日夜景なんかより遥かに美しく輝いていたのは、私の隣で私の作ったカクテルに感激している君の笑顔だった。

君は私が捧げたカクテルを見つめ口にすると「一口のカクテルがこんなに人を幸せな気持ちにさせることができるのね。」って呟いたよね。
君のその一言で私はどれだけ勇気付けられただろう。
これから先私が一人前のバーテンダーになって、数え切れないほどのお客さんにカクテルを提供するようにになったとしても、みゆのこの言葉が私にとっていつまでも最高の励ましの言葉になることを確信できた。
君の一言は私にとってそれほど一番効力のあるものなんだ。

喜んでカクテルを口にする君を前に、別れの言葉を切り出すのは自分の身を裂くようだった。
「みゆと会うのは今日で最後。」
と切り出した私の言葉に、君は切ないほど私に縋(すが)りついてきた。
どんなに君を説得しても、納得できない君の姿を見ながら、やっぱり一旦決意した別れを撤回することができたなら・・・何度もそう思った。
私は君を説得してるようで、ほんとは自分自身に言い聞かせていたのかもしれない。

「まさきと一緒にいられるなら、どんなことを捨ててもあなたと一緒にいたい」
君がそう言って涙を流す姿を見たとき、私の心がどれだけ張り裂けそうだったか・・・。
私にとって君の涙ほど辛いものはないから。

君はもう一つ、私たちの出会いが運命的なものだったってことを教えてくれたね。
私たちが出逢ったあの日。私が君に一目で魅せられて、君に初めて話しかけた。

実はあの日、君のＢｉｒｔｈｄａｙだったんだね。
しかもそのことを君はずっと覚えていてくれてたんだね。
あんな小さなチョコレート一つで、君はそんなにも大切な思い出として心に残していてくれてたんだ。
君のそういう純粋で澄み切った心が本当に好きだった。
君の汚れない心は、君の透き通った目にそのまま表れている。だから君の目がとても好きだった。
そんな君を突き放して、君への想いを全てを捨てて、こんなにも愛してる君のそばから離れようとしている現実があまりにも残酷で、ついにこみ上げてくる涙を耐えることができなくなった。
こんな風に涙を流すほど弱い自分じゃなかったはずなのに・・・。
どんなに辛いことも苦しい状況も乗り越えてきたはずなのに・・・。
君との別れの前では、無力な弱々しい子犬のようなだな。
君と最後となる日に、みゆが私のことをどれだけ想っていてくれていたか、そして私がこんなにも君の事を深く愛していたこと、そのことを改めて痛感した。
別れの時になってそんなことを痛いほど感じたって、もうなんにもならないのに。
現実ってなんて残酷なんだろう・・・。そう思わないか？みゆ・・・。
でもね、君がそれだけ私のことを大切に想っていてくれたこと、それを知ることができただけで、私は君と出逢えたこと後悔してないよ。私たちの結末がこんな風になってしまったとしても・・・。

みゆ・・・。
君のＢｉｒｔｈｄａｙをこれからもずっとずーっとそばで祝ってあげることができたなら・・・。
私だって君と一緒にいたいよ。君が私のことを想ってくれている数百倍も数万倍も・・・。
君と一緒にいれることができるなら、これからずっと君を愛するこ

とを許されるなら、私だって何を捨てても構わない。
バーテンダーになる夢だって、君と引き換えにすることができるほどの大きな理由にはならない。
君とあと数分、いや数秒でも一緒にいられるのなら、その為にさえも私は何もかも捨てることができるよ。
それだけ私は君のことを愛してる。
私が女であるが故に君のコトを手放さなければいけないなんて、どんなに考えても納得できることじゃない。
でも、今の自分では君を幸せにしてあげることはできない、これが事実だということに気づいてしまった。
気づいてしまった以上、自分の君への想いを押し通してまで、君を束縛することなんて私にはできない。
だって私がみゆとの別れを決意したのは、たった一つの理由のため。

「みゆのこれからの幸せが私の幸せそのものだから・・・。」

そして君は最後に私のこの想いを理解してくれたね。
「あなたに出遭えてほんとによかった。」
君のこの言葉ですべての悲しみから救われた気がする。そして君は言葉を続けた。
「まさきを愛せたこと、あたし一生忘れたりなんてしないよ。絶対忘れない！まさきと一緒に過ごした一瞬一瞬、あたしにとっては宝物だから。」
君との別れに耐えられず、君との思い出や君への想いを消すことに必死だった私に、君は私の事を絶対忘れない、そう言ってくれた。
君はほんとに強い女性だね。
確信して言い放った君の姿がとても美しく輝いて、私の脳裏に焼きついた。
やっぱり私はこの女性を愛することができてよかった。幸せだった。
そう確信できた瞬間だった。

そして君は振り返ることもなく、私の頬をなでる優しい風のように、すーっと私の前から立ち去った。
君を失う最後の瞬間・・・。
私の口から思わずこぼれた言葉も、君には届かなかったのかな・・・。

君がいない世界でも、私は一流のバーテンダーになるために頑張るよ。
君が最後に見せてくれたあの強い姿に負けることのないように。
いつの日か君に再会することが許されたとき、堂々と君に自分の姿を見せられるように。
そしていつの日か君に最高のカクテルを作ってあげることを密かに夢見ながら。
君が誰の奥さんになっても、そしてお母さんになったとしても、私の心に残ってるみゆの姿は世界一幸せで、世界一輝いた女性だよ。

君への最後の想い。君に届くことのなかったこの想い。
いつか君に届きますように・・・。

「Ｊｕｓｔ　ｆｏｒ　ｙｏｕ．．．」

届くことのないみゆへの手紙（後書き）

最後までご愛読いただき、誠にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5601u/

CRAZYな恋

2012年1月10日08時47分発行